

Arita Kotabe
有田・小田部 48

－ 有田遺跡群第230次調査の報告 －

2010

福岡市教育委員会

Arita Kotabe
有田・小田部 48

—有田遺跡群第230次調査の報告—



ART230 0836

2010

福岡市教育委員会



第230次調査地点全景（西から）



掘立柱建物SB08完掘（南から）

序

福岡市は大陸に近いという地理的条件から、文化の流入拠点、大陸との貿易基地として古くからの歴史を有しています。現在は歴史的、地理的に関係の深いアジアとのつながりを重視し、「アジアの交流拠点都市」を目指し、アジアの様々な地域との交流や学術・文化などの交流を行っています。

今回報告する有田遺跡群は市域の西部の早良平野に所在する遺跡で、縄文時代晚期から近世にかけての重要な遺構、遺物が発見されています。

本書は2008年度に実施した有田遺跡群第230次調査の成果を報告するものです。調査の結果、日本書紀に記述された「那津官家」に関わると考えられる区画施設や古代の役所である「早良郡衙」の正倉建物と考えられる倉庫跡などが発見され、この地域の古代史を考える上で重要な成果を得ることができました。本書が文化財保護のより一層のご理解の一助となり、学術研究の資料として活用いただければ幸いです。

最後になりましたが、坂口午朗様をはじめとする関係各位のご協力に並び調査に厚くお礼申し上げます。

平成22年3月23日

福岡市教育委員会
教育長 山田 裕嗣

例言

1. 本書は宅地分譲に伴い、福岡市教育委員会が2008年度に行った有田遺跡群第230次調査の報告である。
2. 本書に使用した遺構実測図は菅波正人、森本幹彦が、遺物実測図は菅波が行った。トレースは熊塙御堂和香子が行った。
3. 本書に使用した写真は菅波が撮影した。
4. 本書に使用した座標は国土座標第II系を使用し、本書に使用した方位は座標北である。
5. 本書の執筆・編集は菅波正人が行った。
6. 今回報告する出土遺物および遺構、遺物の記録類は福岡市埋蔵文化財センターにおいて収蔵・管理される予定である。

調査番号	調査次数	担当者	所在地	分布地図番号	調査期間	調査面積	遺跡の時代
0834	第230次	菅波	早良区有田1丁目 20-1、20-13	原 82 0309	2008.8.18 ~ 10.07	300m ²	古代建物

目次

I	はじめに	
1.	調査に至る経緯	1
2.	調査の組織	1
3.	遺跡の位置と環境	2
II	第20次調査の記録	
1.	調査の概要	5
2.	調査の記録	8
3.	小結	23

挿図目次

Fig. 1	有田遺跡群位置図（1/25,000）	3
Fig. 2	有田遺跡群調査地点位置図（1/7,500）	4
Fig. 3	有田遺跡群第230次調査地点周辺遺構配置図（1/1,000）	6
Fig. 4	有田遺跡群第230次調査地点周辺遺構配置図（1/500）	7
Fig. 5	有田遺跡群第230次調査遺構配置図（1/200）	7
Fig. 6	貯蔵穴実測図（1/40）	8
Fig. 7	貯蔵穴出土土器実測図1（1/3）	9
Fig. 8	貯蔵穴出土土器実測図2（1/3）	10
Fig. 9	貯蔵穴出土石器実測図1（1/1、1/2）	11
Fig. 10	柵状遺構実測図（1/100）	12
Fig. 11	掘立柱建物実測図（1/100）	13
Fig. 12	土坑実測図（1/40）	14
Fig. 13	柵状遺構出土土器実測図（1/3、4）	15
Fig. 14	柵状遺構出土土器実測図（1/3）	15
Fig. 15	掘立柱建物出土土器実測図（1/3）	16
Fig. 16	土坑出土土器実測図（1/40）	17
Fig. 17	掘立柱建物及び溝実測図（1/100、1/40）	18
Fig. 18	掘立柱建物及び溝出土遺物実測図（1/3）	19
Fig. 19	A群建物配置図（1/1,000）	24
Fig. 20	B群建物配置図（1/1,000）	24
Fig. 21	C群建物配置図（1/1,000）	25

図版目次

卷頭カラー

第230次調査地点全景（西から）

掘立柱建物SB008完掘（南から）

- PL. 1 1 調査区全景（西から）
- PL. 1 2 調査区全景（東から）
- PL. 2 1 調査区西半全景（東から）
- PL. 2 2 調査区東半全景（東から）
- PL. 3 1 貯蔵穴SU023完掘（南から）
- PL. 3 2 貯蔵穴SU022完掘（南から）
- PL. 4 1 土坑SK002遺物出土状況（南から）
- PL. 4 2 土坑SK003焼土塊出土状況（北から）
- PL. 5 1 機状遺構SA006検出状況（東から）
- PL. 5 2 機状遺構SA006完掘（東から）
- PL. 6 1 機状遺構SA007完掘（南から）
- PL. 6 2 機状遺構SA018完掘（南から）
- PL. 7 1 掘立柱建物SB008検出状況（南から）
- PL. 7 2 掘立柱建物SB008完掘（南から）
- PL. 8 1 掘立柱建物SB008-柱穴P01半掘（南から）
- PL. 8 2 掘立柱建物SB008-柱穴P02半掘（南から）
- PL. 8 3 掘立柱建物SB008-柱穴P03半掘（南から）
- PL. 8 4 掘立柱建物SB008-柱穴P05半掘（南から）
- PL. 8 5 掘立柱建物SB008-柱穴P06半掘（南から）
- PL. 8 6 掘立柱建物SB008-柱穴P07半掘（南から）
- PL. 8 7 掘立柱建物SB008-柱穴P08半掘（南から）
- PL. 8 8 掘立柱建物SB008-柱穴P11半掘（南から）
- PL. 9 1 掘立柱建物SB008-柱穴P01完掘（南から）
- PL. 9 2 掘立柱建物SB008-柱穴P02完掘（南から）
- PL. 9 3 掘立柱建物SB008-柱穴P03完掘（南から）
- PL. 9 4 掘立柱建物SB008-柱穴P04完掘（南から）
- PL. 9 5 掘立柱建物SB008-柱穴P05完掘（南から）
- PL. 9 6 掘立柱建物SB008-柱穴P06完掘（東から）
- PL. 9 7 掘立柱建物SB008-柱穴P07完掘（東から）
- PL. 9 8 掘立柱建物SB008-柱穴P11完掘（東から）
- PL. 10 1 掘立柱建物SB009、015完掘（南から）
- PL. 10 2 溝SD001土層（北から）
- PL. 11 遺物写真 1
- PL. 12 遺物写真 2
- PL. 13 遺物写真 3
- PL. 14 遺物写真 4

I はじめに

1. 調査に至る経緯

埋蔵文化財第1課では開発計画が上がると試掘調査を実施し、各地点の状況の把握に努めている。その上で、地権者と遺跡保全のために設計変更等の協議を持つ。しかし、建物の構造上、地下の遺構に影響を及ぼす場合、地権者の協力を得て、記録保存のための調査を実施している。

本書で報告する有田遺跡群は昭和41年に九州大学考古学研究室によって、第1次調査が行われて以来、縄文時代～中世にわたる代表的集落遺跡として知られてきた。しかし、現在、有田遺跡群が所在する有田・小田部地区は都市近郊の住宅地として宅地化が進み、個人住宅、共同住宅等の建築により日々町並みは変化している。昭和50年以降、有田遺跡群は重点地区の一つとして、1,000m²以下の個人の専用住宅についても国庫補助を受け調査を行ってきた。その結果、発掘調査は平成21（2009）年度現在、235次に及ぶ。

平成20（2008）年6月19日付けで、早良区有田2丁目20-1、20-13の畠地について、坂口午朗氏より宅地分譲の計画に先立つ、埋蔵文化財の有無についての照会がなされた。当該地は周知の包蔵地である有田遺跡群に含まれ、この照会以前の試掘調査により、敷地全体に遺構が広がることが確認されていた。それらの成果と工事の計画をもとに原因者及び関係者と協議を重ねた結果、宅地分譲に伴い、車庫等で切り下げを行う部分を調査対象として、平成20年8月18日より発掘調査を行うこととなつた。

2. 調査の組織

調査委託 坂口午朗

調査主体 福岡市教育委員会

教育長 山田裕嗣

文化財部長 宮川秋雄 矢野三津夫（前任）

調査庶務 文化財整備課

文化財整備課長 秋吉 誠

管理係長 白川国俊

管理係 井上幸江

試掘担当 埋蔵文化財第1課

事前審査係長 吉留秀敏

事前審査係 阿部泰之

調査担当 埋蔵文化財第2課

課長 田中寿男

主査 香波正人

3. 遺跡の位置と環境

福岡市の西側に位置する早良平野は、東側を平尾丘陵、南側を脊振山系、西側を脊振山から派生した叶ヶ岳に囲まれる。北は博多湾に面し、平野の中央には室見川が貫流する。平野内には幾つかの洪積台地も点在するが、大部分は室見川と西から十郎川、名柄川、金屑川等の沖積作用によって形成されたものである。また、室見川の河口には愛宕山、龜原山等の第三紀の独立丘陵が存在する。一方、海岸部には湾内の回流作用によって、生ノ松原、百道浜等の弓状の砂丘が形成される。砂丘の南側は古代においてラグーンをなしていたと考えられる。

早良平野の遺跡は地形的に見ると、海岸線の砂丘上、室見川及び十郎川、金屑川流域の沖積微高地、油山から北西に派生する低丘陵、脊振山から北に派生する西山、飯盛山、叶ヶ岳の東側台地等に分布する。平野を囲む東西の丘陵上には古墳時代後期の群集墳が多数分布する。砂丘上の遺跡では、弥生時代前期から古墳時代前期にかけての墓地、集落等が検出された藤崎遺跡や西新町遺跡などが挙げられる。これらの遺跡では畿内系や山陰系の搬入土器、朝鮮半島産の陶質土器、大型板状鉄製品等が出土しており、国内外の各地との盛んな交流を窺うことができる。室見川東岸流域の沖積微高地では田村遺跡、四箇遺跡などが分布しており、縄文時代から中世にかけて集落が連綿と形成されている。一方、室見川西岸流域の橋本一丁田遺跡や福重樅木遺跡では弥生時代早期の土器や石器、農具等が出土しており、いち早く水稻農耕を受容した地域のひとつとされる。吉武遺跡群では弥生時代～古代にかけての集落、墓地などが多数検出されており、吉武高木遺跡3号木棺では銅劍、銅矛、銅戈、銅鏡等が出土しており、早良平野の盟主的地域と考えられている。

有田遺跡は室見川の右岸の中位段丘上に立地し、遺跡群は旧石器時代から近世にかけての複合遺跡で、早良平野の拠点的集落の一つである。特に弥生時代初頭には環濠が掘削され、以後、古墳時代にかけて連綿と集落は形成される。弥生時代の墓地構造では多くの壺棺墓が検出され、細形鋼劍、銅戈、前漢鏡、小型彷彿鏡等が出土している。古墳時代では堅穴住居跡等から陶質土器や軟質土器が多く出土し、朝鮮半島との関わりの強さを窺うことができる。また、古墳時代後期から奈良時代にかけては柵や溝に区画された大型の倉庫群が各所に営まれており、那津官家や早良郡衙に関わる施設の存在が指摘されている。早良平野は律令期では早良郡にあたり、「和名抄」によると、比伊、能解、額田、早良、平群、田部、曾我の7郷が存在する。有田遺跡はそのうちの田部郷に含まれるものと考えられている。

有田遺跡群調査地点別報告書一覧

福岡市 報告書(集)	調査次数	福岡市 報告書(集)	調査次数	福岡市 報告書(集)	調査次数
1 1	308	110 112 114 116 138 151 158 164	657	182 186 187 190 192 193	
2 2a	339	160 169	684	115 168 180	
43 3a	340	125 135 140 145 148	725	124 150	
58 17 21 22 23 24 25 26 27	377	6 50 58 61 65 67	784	194 195 196 201 203 204	
81 7 8 28 29 31 33 34	378	136 141 142 143	869	205	
84 59	426	147 148 153	870	9 10 11 12 13 14 15 171 183 191 198 199 200	
95 62	427	54 68 69 73		206 210 215	
96 19 32 36 37 38 40 41 42 45	434	167	871	211	
110 30 44 46 47 48 49 55 63 75	470	4 176	919	216	
113 5 39 51 53 56 57 66 76 86	471	74 77 78 88	920	218 219 222 224 225	
129 81 82 83 87 95 97 101	472	172	971	15	
139 59	473	173	1024	226	
155 43 64 108	512	178	1067	132 137 221 223 228 229 231 232	
173 35 70 71 72 102 105 108 109 111 117 122	513	175 177 179	1068	230	
212 109 103 130 134	538	79	年報15	197	
234 107 113 120 131 133 146 149	547	80	年報16	201	
264 119 121 126 127 128 129 144 156 157 162	574	181 184	年報19	208	
265 152	608	188	年報20	217	
266 118 123 139 155 161	649	189	年報20	220	
307 154 159 163 165	651	196	年報22	227	



Fig. 1 有田遺跡群位置図 (1 / 25,000)



Fig. 2 有田遺跡群調査地点位置図 (1/7,500)

II 調査の記録

1. 調査の概要

本遺跡は福岡市西部に位置する早良平野北側の独立丘陵上に立地する。調査地点は有田遺跡群の最高所付近に当たり、標高約13.6mを測る。調査地点周辺は弥生時代～中世にかけての遺構群が錯綜する場所であり、有田遺跡群の中で遺構密度が最も高い場所でもある。弥生時代では前期初頭の環濠が掘削されており、調査地点はその内部にあたる。古墳時代では5世紀代の陶質土器や軟質土器などが多数出土しており、朝鮮半島との関わりの深い人たちの居住を窺うことができる。また、調査地点北側に位置する第107次、181次調査では古墳時代後期～奈良時代にかけての区画施設や大型建物などが検出されており、那津官家や早良郡衙に関わる施設と考えられている。今回の調査で検出された柵状遺構や総柱建物などはそれら一連の遺構群と考えられるものである。

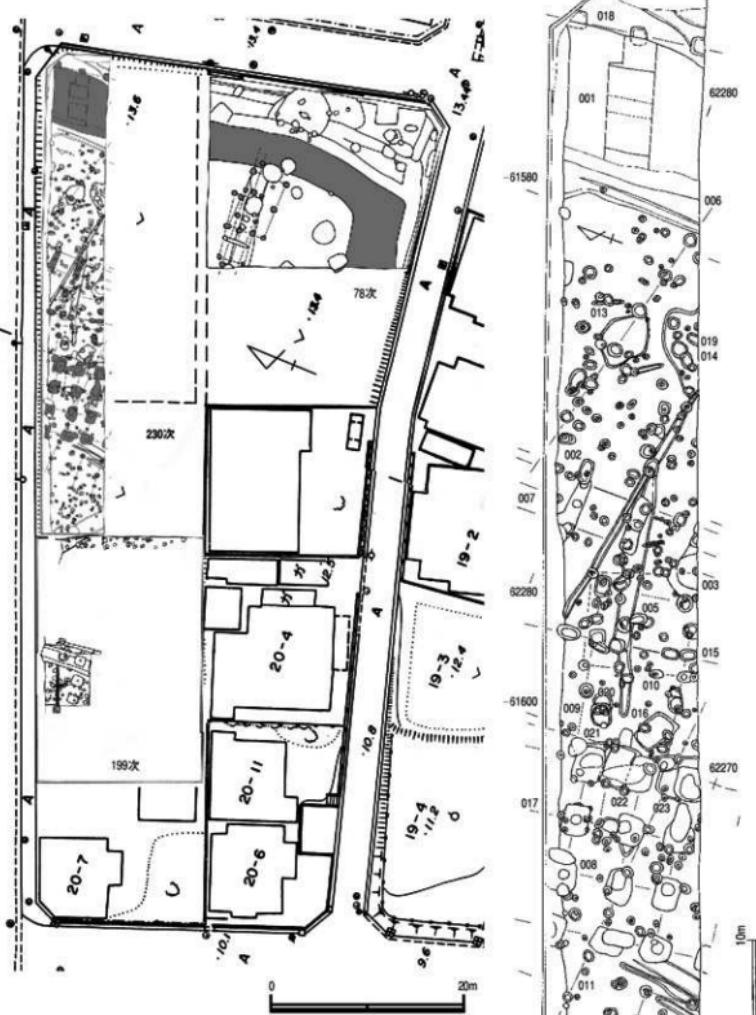
調査は現況の畠地の耕作土を約20～30cm除去して検出した、鳥栖ロームを遺構面として行った。今回検出した遺構は弥生時代前期の貯蔵穴、古墳時代後期の柵状遺構、奈良時代の総柱建物、中世の堀などである。弥生時代の貯蔵穴は長方形プランを呈し、深さ60cmを測るものもある。古墳時代後期の柵状遺構SA007は那津官家関連遺構に特徴的な3本の柱からなるものである。奈良時代の総柱建物SB008は柱径40cmを超えるもので、早良郡衙の正倉の一つと考えられる。中世の堀SD001は幅約5m、深さ約2mの断面V字形を呈するもので、16世紀代のものと考えられる。遺物は堀、貯蔵穴、柱穴等から弥生土器、土師器、須恵器等が出土した。今回の調査では那津官家や早良郡衙関連の遺構を確認でき、それらの施設の規模、構造を考える上で重要な成果が得られた。

表1 第230次調査地点遺構一覧

遺構名	遺構種	規模(短軸×長軸×深さ)(cm)	時期	備考	挿図(Fig.)	図版(Pl.)
001	溝	延長 600×幅 500×深 170	中世	調査区外に広がる	17	10-2
002	土坑	116×196×15	古代	土師器坏、皿多数出土	5	4-1
003	土坑		古代	焼土塊多数出土	5	4-2
004	土坑		中世		5	
005	溝		古代～中世	007を切る	5	
006	柵状遺構	延長 900+a	古墳後期	調査区外に広がる、5間分を検出	10	5
007	柵状遺構	延長 520+a	古墳後期	調査区外に広がる、2間分を検出	10	6
008	振立柱建物	梁行 690×桁行 630+a	古代	調査区外に広がる、3×3間分を検出、009・011に切られる	11	7～9
009	振立柱建物	梁行 360×桁行 660	古代	1×3間、008を切る	11	
010	振立柱建物	梁行 400×桁行 400	古代	2×3間	11	
011	柵状遺構	延長 1060+a	中世	調査区外に広がる、6間分を検出、008を切る	17	
012	振立柱建物	梁行 200×桁行 370	中世	1×3間	17	
013	貯蔵穴	188×214×10	弥生		6	
014	土坑		弥生～古墳		5	
015	柵状遺構	延長 400+a	古代	調査区外に広がる、2間分を検出	10	
016	貯蔵穴	120×164×25	弥生		6	
017	振立柱建物	梁行 340×桁行 190+a	中世	調査区外に広がる、2×1間分を検出	17	
018	柵状遺構	延長 500+a	古代	調査区外に広がる、2間分を検出	10	6
019	土坑		弥生～中世		5	
020	土坑		弥生		5	
021	土坑		弥生		5	
022	貯蔵穴	134×180×64	弥生	008に切られる	6	3-2
023	貯蔵穴	130×180×20	弥生	008に切られる	6	3-1



Fig. 3 有田遺跡群第230次調査地点周辺遺構配置図 (1/1,000)



2. 調査の記録

1) 弥生時代の遺構・遺物

弥生時代の遺構は前期の貯蔵穴4基の他、土坑、柱穴などがある。後世の遺構に切られて、平面形が不明瞭なものが多いが、SU016、022は隅丸長方形の平面形を呈する。この他、SU013の南側にあるSK014、019からも前期の土器が出土している。ただ、これらの遺構からは土師器、須恵器なども出土しており、この時期の遺構ではないと考えられる。

貯蔵穴

SU013 (Fig.6) 調査区東側に位置する。平面形は不整形である。埋土は暗褐色粘質土である。規模は短軸長188cm、長軸長214cm、深さ10cmを測る。遺物は弥生土器、黒曜石片などが出土した。

SU016 (Fig.6) 調査区中央に位置する。平面形は隅丸長方形である。埋土は暗褐色粘質土である。規模は短軸長120cm、長軸長164cm、深さ25cmを測る。遺物は弥生土器 (Fig.7-1)、黒曜石石核、剥片などが出土した。

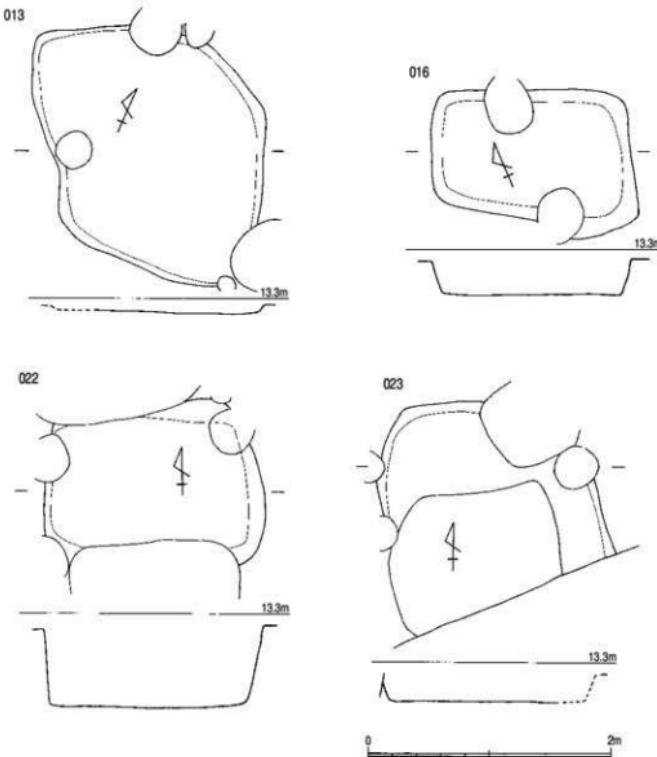


Fig. 6 貯蔵穴実測図 (1/40)

SU022 (Fig.6) 調査区中央に位置し、SB008-P8に切られる。平面形は隅丸長方形である。壁の立ち上がりはほぼ垂直である。埋土は暗褐色粘質土である。規模は短軸長134cm、長軸長180cm、深さ64cmを測る。遺物は弥生土器 (Fig. 8 - 11 ~ 38)、黒曜石石核、剥片、碎片などが出土した。時期は板付I式～IIa(古)式期の前期初頭～前半に位置づけられる。

SU023 (Fig.6) 調査区中央に位置し、SB008-P4に切られる。平面形は隅丸長方形である。埋土は暗褐色粘質土である。規模は短軸長130cm、長軸長180cm、深さ20cmを測る。遺物は弥生土器、黒曜石碎片などが出土した。

出土遺物 (Fig. 7~9)

1～5はSK014から出土した。1は刻目が部分的に残る。5は高環脚部で壺との接合部に突帯がつく。6、7はSU016から出土した。6は口縁端部よりやや下った位置に刻目突帯がつく。7は端部の刻目が磨滅している。8、9はSK019から出土した。8は口縁端部付近に刻目突帯がつく。9は壺の肩部でヘラ描きの山形文を施される。沈線の中に赤色顔料が残る。10はP107から出土した壺である。

11～38はSU022から出土した。11～17は口縁端部付近に刻目突帯がつく。18は胴部に刻目突帯がつく。19は胴部で屈曲する形態のものである。20～23は如意形口縁の壺である。刻目は口縁端部に施される。20は口縁端部を外側につまみ出して刻目が施される。24～28は壺の口縁で、28は内面に赤色顔料が残る。29～32は壺の肩部で、32は強いナデによる突帯がつく。33は鉢で、口縁はくの字形に外反する。34～36は壺底部である。37、38は壺底部である。39～41は柱穴から出土した。39は浅鉢で、くの字形に屈曲する。

42～54は石器である。石器の出土量、器種構成は表3、4に示した。石器の大半は弥生時代のもので、旧石器時代と考えられるものは碎片が数点ある。石材は黒曜石が大半である。42～47は凹基式二等辺三角形の石鏃で、石材は黒曜石である。48は石錐である。石材は黒曜石である。49～51は磨製石斧である。49、50は刃部、51は基部の破片である。52、53は石包丁である。52は紐孔の一部が残る。54は打製石斧で、石材は玄武岩である。

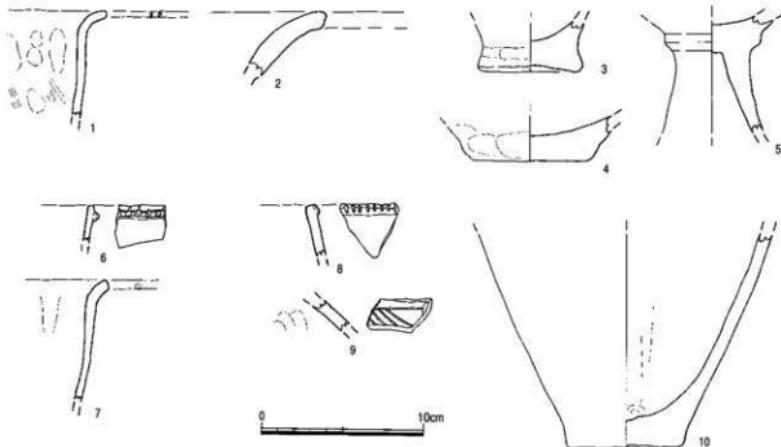


Fig. 7 勝蔵穴出土土器実測図 1 (1/3)

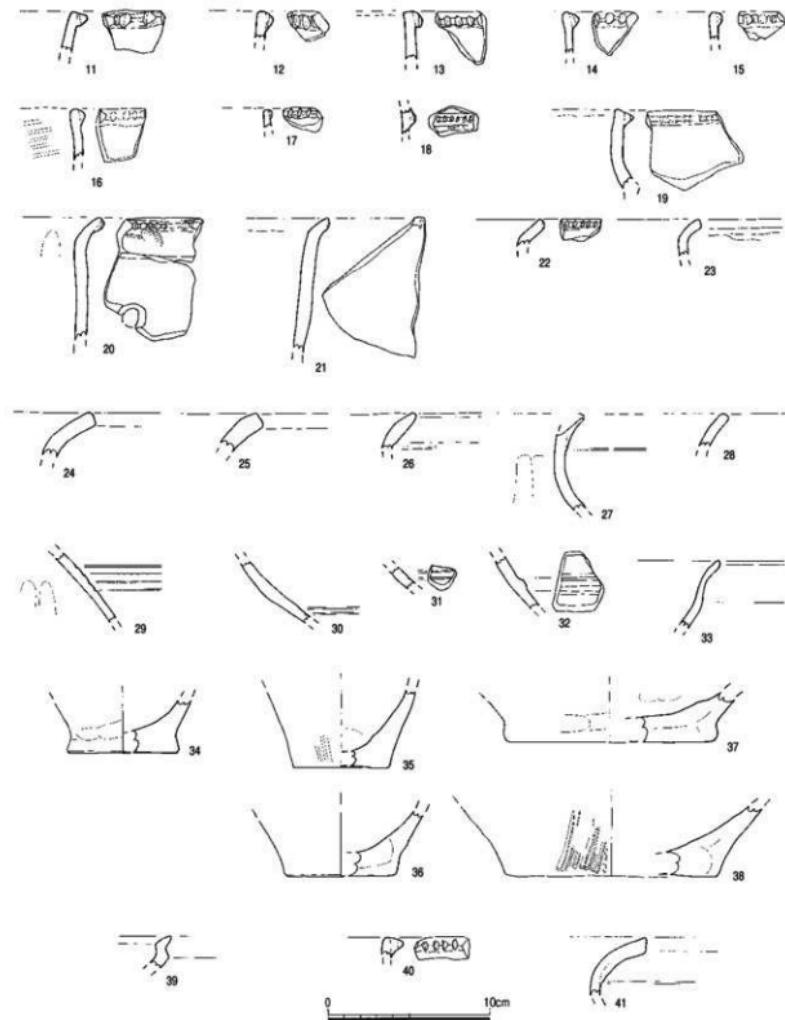


Fig. 8 貯藏穴出土土器実測図 2 (1/3)

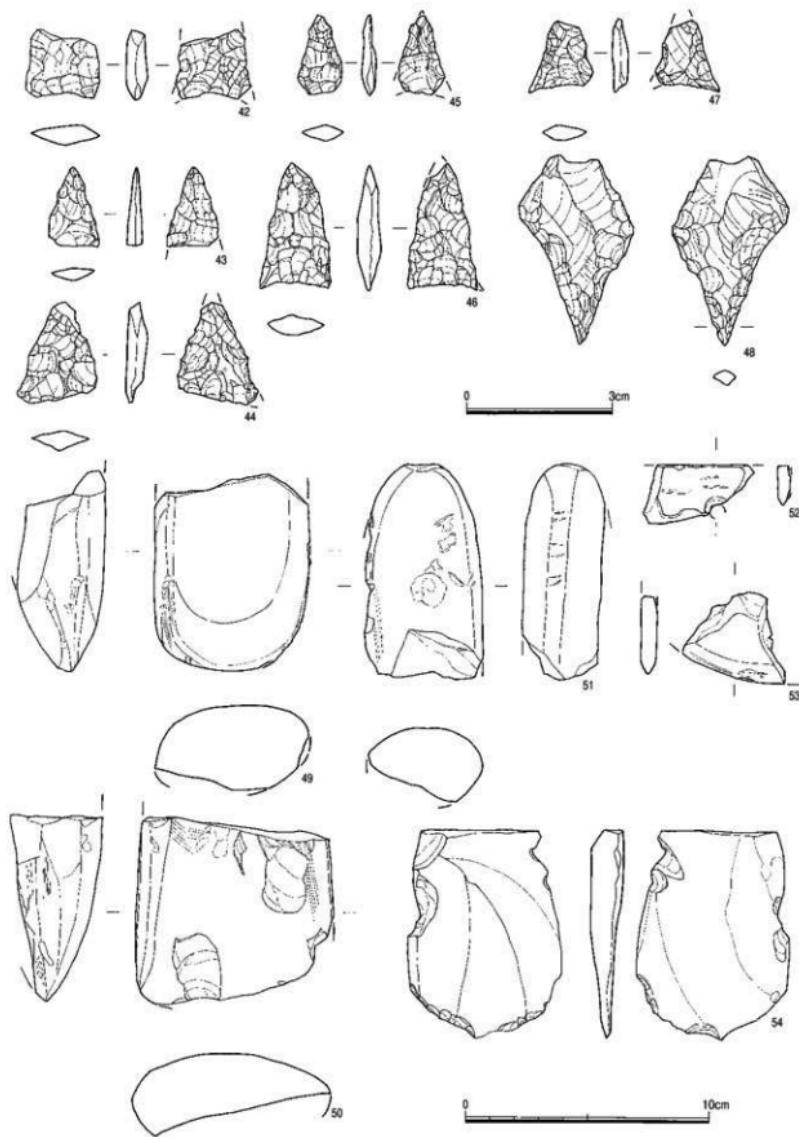


Fig. 9 貯藏穴出土石器実測図 1 (1/1, 1/2)

2) 古墳後期~古代の遺構・遺物

この時期の遺構は古墳時代後期の柵状遺構2条、古代の掘立柱建物3棟、柵状遺構2条、土坑1基の他、柱穴などがある。

柵状遺構

SA006 (Fig.10) 調査区東側に位置し、東西方向に延びる。主軸方位はN-76°-Wで、延長5間、900cm分を検出した。柱間は約180cmを測る。遺構は調査区外に広がる。柱穴の平面形は楕円形で、径約40~60cmを測る。柱痕が残るものは少ないが、柱の径約20cmを測る。遺物は土師器、須恵器 (fig.12-56~60) などが出土した。時期は出土遺物から6世紀中ごろから後半に位置づけられる。

SA007 (Fig.10) 調査区東側に位置し、南北方向に延びる。主軸方位はN-2°-Eで、延長2間、520cm分を検出した。柱間は約260cmを測る。遺構は調査区外に広がる。柱穴の掘り方は布掘りで、長さ約220~250cm、幅約50~60cmを測る。柱痕は残っていないが、掘り方に3本の柱が設置されていたと判断される。掘り方の中央が両脇より深くなっている。遺物は土師器、須恵器 (fig.12-61~63) などが出土した。時期は出土遺物から6世紀中ごろから後半に位置づけられる。

SA015 (Fig.10) 調査区中央に位置し、南北方向に延びる。主軸方位はN-9°-Wで、延長2間、400cm分を検出した。柱間は約200cmを測る。遺構は調査区外に広がる。柱穴の平面形は隅丸長方形で、一辺約60~80cmを測る。柱痕は残るものはない。遺物は土師器、須恵器 (fig.12-64~71) などが出土した。時期は出土遺物から8世紀末~9世紀初頭に位置づけられる。

SA018 (Fig.10) 調査区東側に位置し、南北方向に延びる。主軸方位はN-4°-Wで、延長2間、

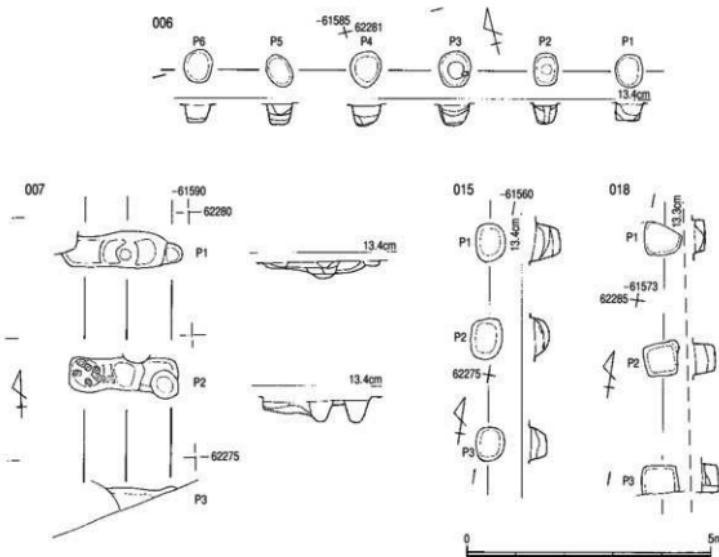
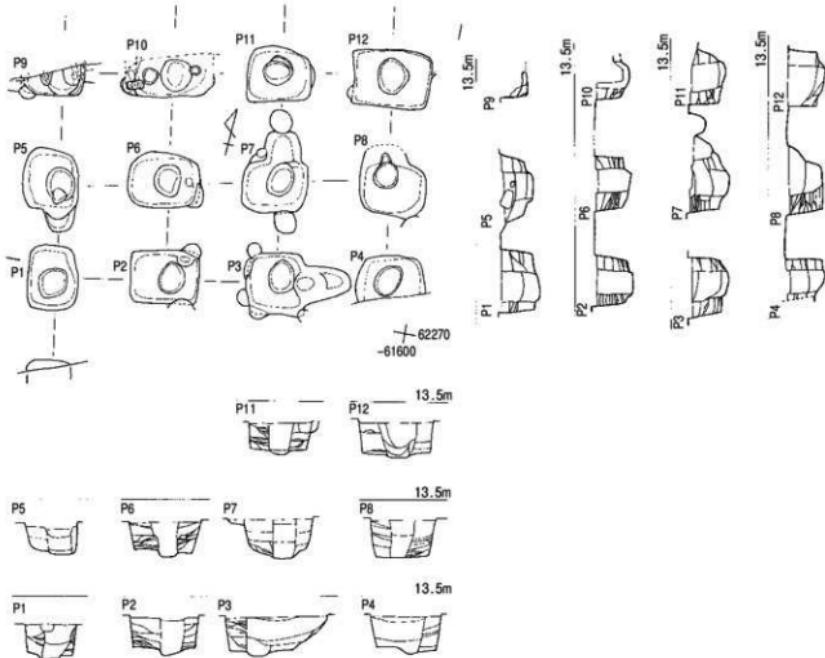


Fig.10 柵状遺構実測図 (1/100)

008



009

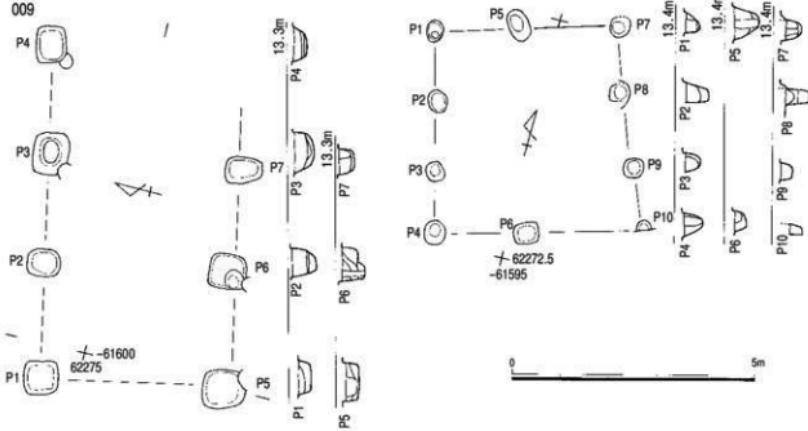


Fig.11 掘立柱建物実測図 (1/100)

500cm分を検出した。柱間は約250cmを測る。遺構は調査区外に広がる。柱穴の平面形は隅丸方形で、一辺約60～70cmを測る。柱痕が残るものはない。遺物は土師器、須恵器などが出土した。出土遺物が少なく、時期は明確ではないが、8～9世紀代に位置づけられると考える。

掘立柱建物

SB008 (Fig.11) 調査区中央に位置し、遺構は調査区外に広がる。構造は総柱建物で、3×3間分を検出した。主軸方位はN-9°-Wで、梁行約690cm、柱間は約230cmを測る。桁行630cm、柱間は約210cmを測る。調査区南側の試掘の結果、建物は南側には延びず、北側に1間分延びると判断される。したがって、この建物は南北方向に配置された3×4間の総柱建物と考えられ、梁行690cm、桁行840cmの規模が想定される。柱穴の平面形は隅丸長方形～長方形で、一辺約100～150cmを測る。P 3、4、5、9、10、12は柱の抜き取り跡が見られる。掘り方の底には柱の沈み込みが見られる。柱の径は柱痕から約40～50cmを測る。遺物は弥生土器、土師器、陶質土器、須恵器 (fig.12-73～88) などが出土した。弥生土器や陶質土器はそれ以前の遺構の混入と考えられ、時期は出土遺物から8世紀中ごろ～後半に位置づけられる。

SB009 (Fig.11) 調査区中央に位置し、SB008を切る。構造は1×3間の側柱建物である。構造は総柱建物で、3×3間分を検出した。主軸方位はN-78°-Eで、梁行約360cm、桁行660cm、柱間は約220cmを測る。柱穴の平面形は隅丸長方形で、一辺約40～80cmを測る。柱の径は不明確である。遺物は土師器、須恵器などが出土した。時期は明確ではないが、切り合い関係からSB008に後出する8世紀後半以降に位置づけられる。

SB010 (Fig.11) 調査区中央に位置し、SB009と切り合う。構造は2×3間の側柱建物である。主軸方位はN-13°-Wで、梁行約400cm、柱間は約200cm、桁行400cm、柱間は約130cmを測る。柱穴の平面形は円形～楕円形で、一辺約30～40cmを測る。柱の径は不明確である。遺物は土師器、須恵器などが出土した。時期は不明確であるが、切り合い関係などから9世紀以降に位置づけられる。

土坑

SK002 (Fig.12) 調査区東側に位置し、SA007を切る。平面形は隅丸方形を呈する。短軸長約116cm、長軸長約196cm、深さ約15cmを測る。遺構内から破碎された土師器壊、皿 (Fig.16-89～103) が多数出土した。時期は出土遺物から9世紀初頭に位置づけられる。

SK003 調査区東側に位置し、SA007を切る。遺構は調査区外に広がる。平面形は円形を呈する。遺構内から焼土塊が多量に出土した。遺構の性格は不明である。遺物は土師器、須恵器、羽口などが出土した。時期は不明確であるが、9世紀以降に位置づけられる。

出土遺物 (Fig.13～16)

55～60はSA006から出土した須恵器である。いずれも細片で径は不明確である。55は壺蓋で、天井部には回転ヘラケズリが施される。56は壺蓋の口縁片で、端部には段がつく。57、58は壺身で、57は端部を外側につまみ出す。58は端部に不明瞭な段がつく。60は壺の頸部で、外面に櫛描波状文を施す。61～63はSA007から出土した須恵器である。61、62は壺蓋で、天井部と口縁との境は凹線が巡る。63は高壺の壺部で、外面に櫛描波状文を施す。64～71はSA015から出土した。64～66、71は須恵器、

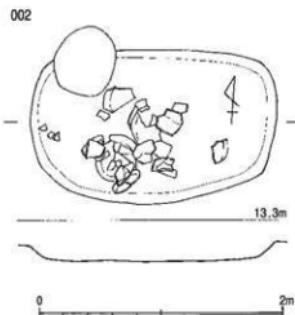


Fig.12 土坑実測図 (1/40)

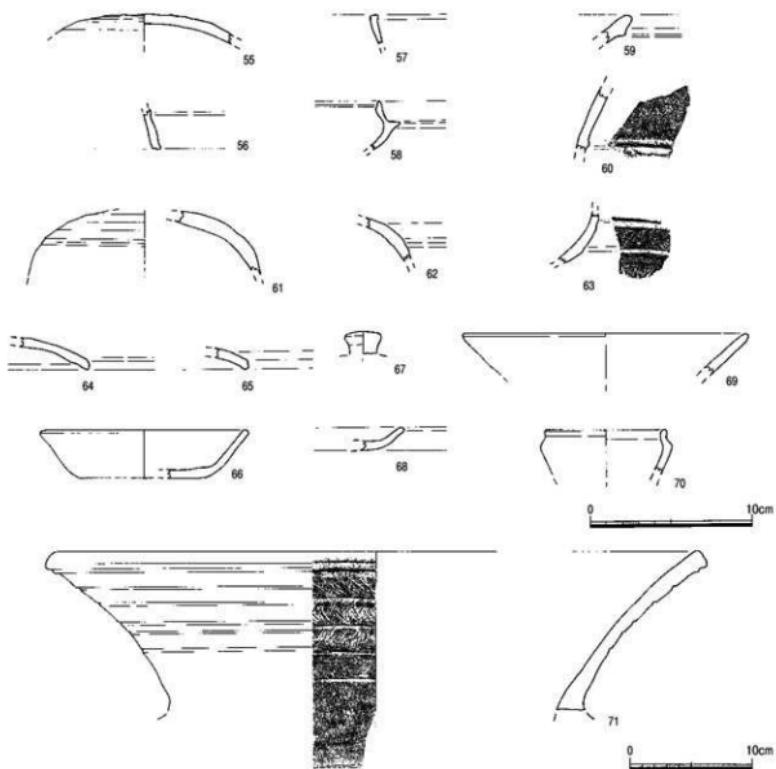


Fig.13 横状造構出土土器実測図 (1/3, 4)

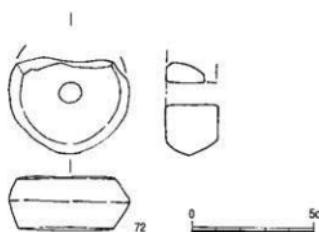


Fig.14 横状造構出土土製品実測図 1 (1/2)

67～70は土器である。64、65は壺蓋で、口縁内面にわずかに段をもつ。66は壺身で、底部は回転ヘラ切り後ナデを施す。71は大甕の口頭部である。外面にはヘラ描による斜線文、羽状文を施す。67は壺蓋の攝みである。70は蓋付の小甕である。口縁はくの字形に屈曲する。72は土製の紡錘車である。一部欠損しているが、断面算盤玉状を呈する。色調は黄灰色を呈する。

73～88はSB008から出土した。この内、79～88はSB008造営以前の造構からの混入と考えられるものである。73～76は須恵器壺蓋である。口縁端部を下に折り曲げるもの(73～75)とほとんど段がつかないもの(76)

が見られる。77、78は土師器坏である。79は土師器甕で、外面に横方向の叩きを施す。80は軟質土器の甕である。底部付近の破片で、細かい平行叩きを施す。胎土は砂粒をほとんど含まず、色調は黄橙色を呈する。81は土師器の高坏である。坏部の底は平坦で、口縁は直線的に延びる。82～88は須恵器もしくは陶質土器と考えられるものである。82は鉢と考えられるもので、外面には櫛描波状文を施す。83は小片で不明確であるが、高坏の脚裾部と考えられる。84～88は器台である。84は鉢部で、口縁はくの字形に屈曲する。外面には櫛描波状文を施す。

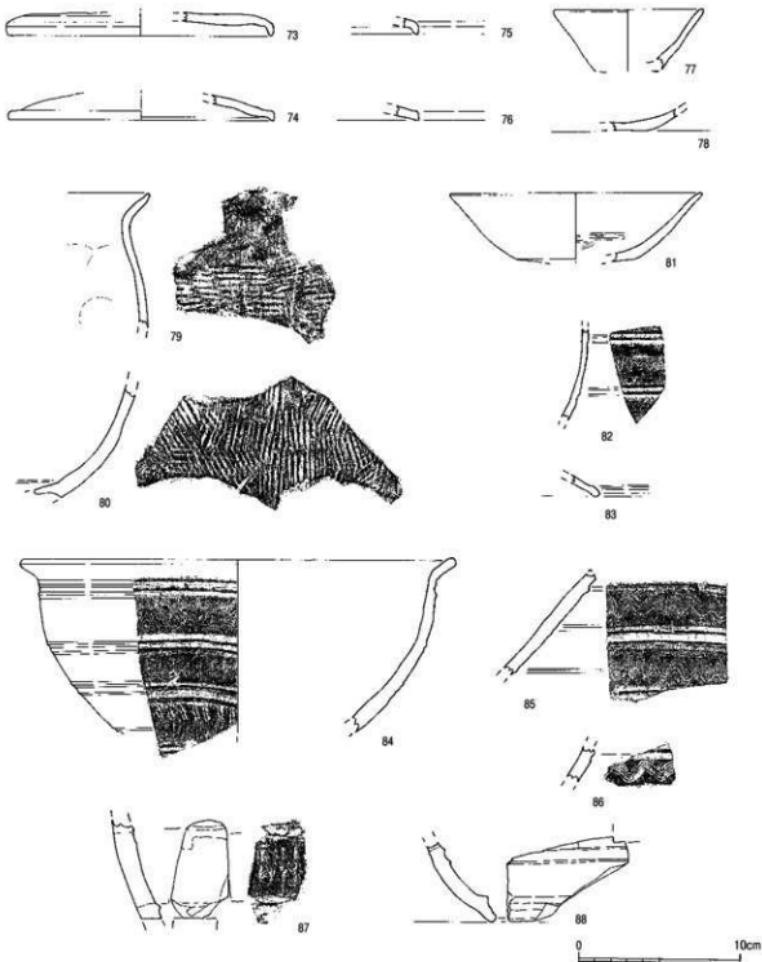


Fig.15 掘立柱建物出土土器実測図（1/3）

89～103はSK002から出土した。89～92は須恵器、93～103は土師器である。89～91は高台付の環身で、高台は底部の端付近につく。92は高台のつないるもので、底部は回転ヘラケズリを施す。93～96は壺である。底部の切り離しは回転ヘラ切りである。胎土、色調とも類似しており、色調は淡黄橙色を呈する。97～103は皿で、底部は回転ヘラケズリを施す。102、103は口縁端部を外反させる。胎土、色調は壺と同様である。

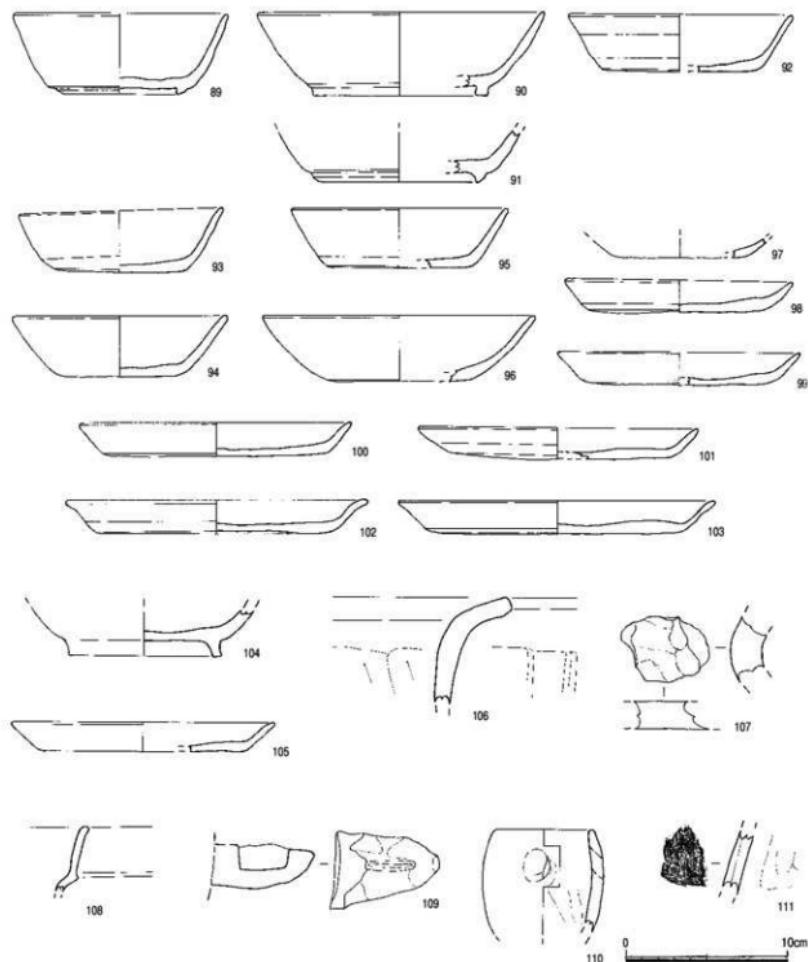


Fig.16 土坑出土土器実測図 (1/40)

3) 中世の遺構・遺物

この時期の遺構では柵状遺構1条、掘立柱建物2棟、溝1条、柱穴などがある。

柵状遺構

SA006 (Fig.17) 調査区西側に位置し、東西方向に延びる。SB008を切る。主軸方位はN-89°-Wで、延長6間、1060cm分を検出した。柱間は約180cmを測るが、P1～2間とP2～3間は約160cmである。遺構は調査区外に広がる。柱穴の平面形は円形で、径約30～40cmを測る。柱痕が残るものは少ないが、柱の径約20cmを測る。遺物は白磁、青磁 (fig.18-112～114) などが出土した。時期は出土遺物から12～13世紀代に位置づけられる。

掘立柱建物

SB012 (Fig.17) 調査区西側に位置する。構造は1×3間の側柱建物である。主軸方位はN-89°-Eで、梁行約200cm、桁行370cm、柱間は約120cmを測る。柱穴の平面形は円形で、径約30～40cm

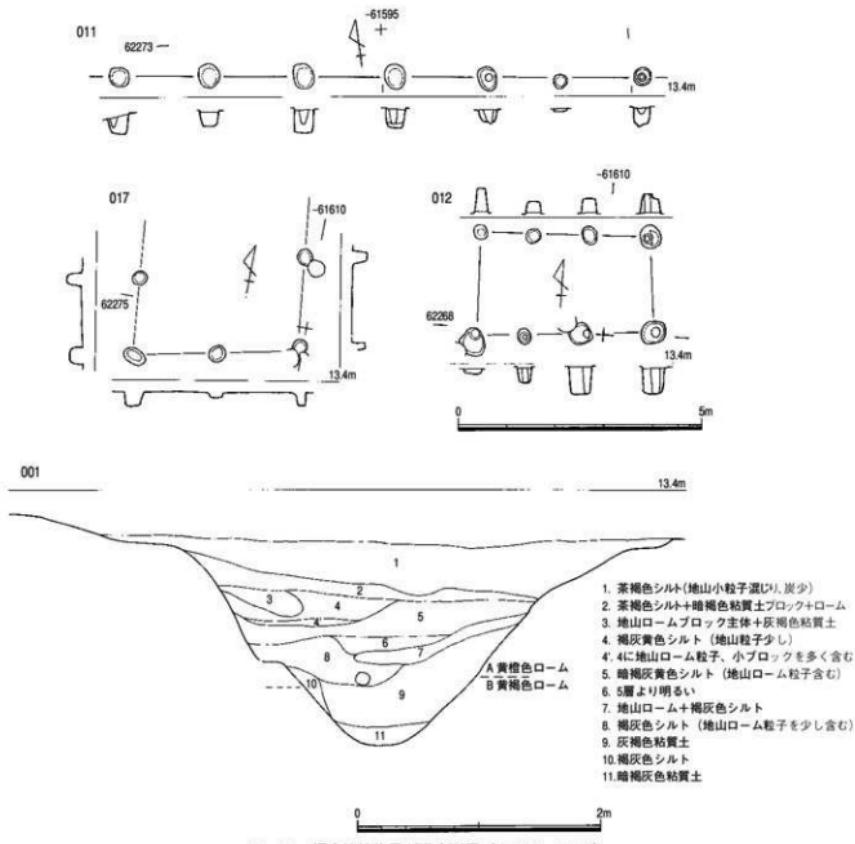


Fig.17 掘立柱建物及び溝実測図 (1/100, 1/40)

を測る。柱の径は約20cmを測る。遺物は出土しておらず、時期は不明である。

SB017 (Fig.17) 調査区中央に位置し、SB008と切り合う。構造は側柱建物で、 2×1 間分を検出した。遺構は調査区外に広がる。主軸方位はN-9°-Wで、梁行約340cm、柱間は約170cm、桁行190cmを測る。柱穴の平面形は円形で、径約30~40cmを測る。柱の径は不明確である。遺物は瓦器 (Fig.18-115) などが出土した。時期は出土遺物から12~13世紀代に位置づけられる。

溝

SD001 (Fig.17) 調査区東側に位置する。延長で600cm分を検出した。幅約500cm、深さ約170cmを測る。溝の断面はV字形である。土層堆積は西側から流れ込んでいるように観察される。遺物は土器類、須恵器の他、輸入陶磁器 (Fig.18-116~124) などが出土した。時期は出土遺物から16世紀代に位置づけられる。

出土遺物 (Fig.18)

112~114はSA011から出土した。112はIV類の白磁碗である。113は玉縁状の口縁をもつ青磁で、盤と考えられる。114は龍泉窯系青磁の底部片で、高台の内側は露胎である。

115はSB017から出土した瓦器碗である。口縁の小片で、内面にはヘラミガキが残る。

116~122はSD001から出土した。この内、120~124は前代の遺構からの混入のもので、白磁、龍泉窯系青磁、施釉陶器などがある。116は土器で、鉢と考えられる。117は朝鮮系陶器皿で、釉色は灰色を呈する。117は青花の皿で、外面に草葉文を施す。118は青花の碗で、外面に芭蕉文、内面に花文を施す。文様は緑がかった青色を呈する。

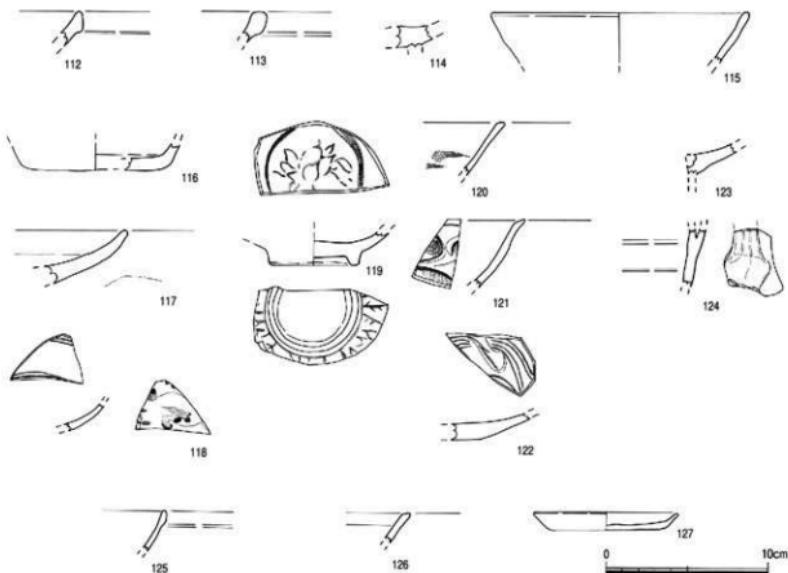


Fig.18 掘立柱建物及び溝出土遺物実測図 (1/3)

表2 第230次調査地点出土遺物観察表

件名 (FIG.)	団体 (PL.)	番号	地区・層位・道構	遺物の種類	器形	法量(高さ/口径/ 底径・長さ/幅/厚さ (cm))	特徴
7	11	1	014 墓中	弥生土器	甕		如意形口縁、端部の刻目が部分的に残る。調整は暗黄灰色
7	11	2	014 墓中	弥生土器	甕		口縁片、外側に段がつ、色調は淡黄褐色
7	11	3	014 墓中	弥生土器	甕	寸/-6.4	やや上部の内側、外側に若干張り出す。色調は赤褐色
7	11	4	014 墓中	弥生土器	甕	寸/-7.0	底部の0.4cm存、色調は暗黄灰色
7	11	5	014 墓中	弥生土器	高杯		脚部、外側の間に三角形の突起がつく。色調は淡黄灰色
7	11	6	016 墓中	弥生土器	甕		刻目突堤文土器、突堤は表面三角形で口縁施面部よりやや下がったところにつく。調整はナデ、色調は淡黄灰
7	11	7	016 墓中	弥生土器	甕		如意形口縁、端部の刻目が磨滅している。色調は暗褐色
7	11	8	019 墓中	弥生土器	甕		刻目突堤文土器、突堤は表面三角形で口縁施面部より、調整はナデ、色調は淡黄灰色
7	11	9	019 墓中	弥生土器	甕		肩部、へら接山形を施す。沈線内に赤色跡料、色調は淡棕色
7	11	10	P107	弥生土器	甕	寸/-7.0	底部付、調整はナデ、色調は暗褐色
8	11	11	022 墓中	弥生土器	甕		刻目突堤文土器、突堤は表面三角形で口縁施面部につく。刻目は深い。調整はナデ、色調は青灰色。
8	11	12	022 墓中	弥生土器	甕		刻目突堤文土器、突堤は表面三角形で口縁施面部につく。刻目は深い。調整はナデ、色調は赤褐色
8	11	13	022 墓中	弥生土器	甕		刻目突堤文土器、突堤は表面三角形で口縁施面部につく。刻目は深い。調整はナデ、色調は暗褐色
8	11	14	022 墓中	弥生土器	甕		刻目突堤文土器、突堤は表面三角形で口縁施面部につく。刻目は深い。調整はナデ、色調は青灰色
8	11	15	022 墓中	弥生土器	甕		刻目突堤文土器、突堤は表面三角形で口縁施面部につく。刻目は深い。調整は不明、色調は淡黄灰色
8	11	16	022 墓中	弥生土器	甕		刻目突堤文土器、突堤は表面三角形で口縁施面部につく。刻目は深い。調整は内面に横方向の溝痕、色調は淡黄灰色
8	11	17	022 墓中	弥生土器	甕		刻目突堤文土器、突堤は表面三角形で口縁施面部につく。刻目は磨滅。調整はナデ、色調は暗褐色
8	11	18	022 墓中	弥生土器	甕		刻目突堤文土器、突堤は表面三角形で口縁施面部につく。刻目は磨滅。体部はくの字形に屈曲する。調整はナデ、色調は淡棕色
8	11	19	022 墓中	弥生土器	甕		刻目突堤文土器、突堤がくづく体部に突出する。調整は不明、色調は淡黄灰色
8	11	20	022 墓中	弥生土器	甕		如意形口縁、端部に凹部を施し刻目を残す。体部に焼成後の穿孔あり。色調は暗褐色
8	11	21	022 墓中	弥生土器	甕		如意形口縁、刻目は不明瞭。色調は暗褐色
8	11	22	022 墓中	弥生土器	甕		如意形口縁、端部外面に刻目。色調は暗褐色
8	11	23	022 墓中	弥生土器	甕		如意形口縁、刻目は無。色調は暗褐色
8	11	24	022 墓中	弥生土器	甕		口縁片、色調は暗灰色
8	11	25	022 墓中	弥生土器	甕		口縁片、色調は暗灰色
8	11	26	022 墓中	弥生土器	甕		口縁片、外面に段がつ、内面と段の部分に赤色跡料が残る。色調は黄褐色
8	11	27	022 墓中	弥生土器	甕		口縁片、外面に段がつ、内面に斜削溝している。色調は黄褐色
8	11	28	022 墓中	弥生土器	甕		口縁片、内面に赤色跡料が残る。色調は淡黄褐色
8	12	29	022 墓中	弥生土器	甕		肩部、へら接沈溝がある。色調は淡黄色
8	12	30	022 墓中	弥生土器	甕		肩部、へら接沈溝がある。色調は淡黄色
8	12	31	022 墓中	弥生土器	甕		肩部、へら接沈溝がある。色調は暗褐色
8	12	32	022 墓中	弥生土器	甕		肩部、強く棒ナットによる突起がある。色調は黄灰色
8	12	33	022 墓中	弥生土器	甕		口縁片、継ぎやくのくじ形に屈曲する。色調は黄褐色
8	12	34	022 墓中	弥生土器	甕	寸/-6.8	底部の0.4cm存、外側に若干張り出す。色調は黄褐色
8	12	35	022 墓中	弥生土器	甕	寸/-6.0	底部の0.4cm存、色調は淡棕色
8	12	36	022 墓中	弥生土器	甕	寸/-7.0	底部の0.8cm存、色調は黄褐色
8	12	37	022 墓中	弥生土器	甕	寸/-13.0	大型の甕、底部のくぼみ存。色調は黄褐色
8	12	38	022 墓中	弥生土器	甕	寸/-13.0	赤色の大型の甕。底部のくぼみ存。継割は細い網目(柔食かも)、底面はケズリ、赤色はほんと残っており色調は暗褐色
8	12	39	008 P12 柱唐	甕	延鉢		口縁部、くの字形に屈曲する。色調は黄褐色
8	12	40	008 P7 柱唐	甕	延鉢		口縁片、底部は表面三角形。色調は淡黄褐色
8	12	41	008 P7 柱唐	甕	延鉢		口縁片、外側には段がつ。色調は黄褐色
9	42	008 P14 振り方	石器	石器	磨製石斧	1.4/1.5/0.4	石材は黒曜石。先端、基部欠損
9	43	008 P5 振り方	石器	石器	石器	1.7/1.1/0.3	石材は黒曜石。両端部欠損
9	44	009P1	石器	石器	石器	2.1/1.7/0.4	石材は黒曜石。先端、片基部欠損
9	45	001GL-20cm	石器	石器	石器	1.7/0.9/0.3	石材は黒曜石。先端、両端部欠損
9	46	P128	石器	石器	石器	2.6/2.0/0.5	石材は黒曜石。先端、片基部欠損
9	47	P162	石器	石器	石器	1.5/1.3/0.3	石材は黒曜石。先端、片基部欠損
9	48	008 PB 振り方	石器	石器	磨製石斧	3.8/2.4/0.7	石材は黒曜石。完形
9	49	022 墓中	石器	磨製石斧	石器	8.1/6.3/3.5	石材は硬質砂岩。基部欠損
9	50	008 PB 柱唐上面	石器	磨製石斧	石器	8.7/8.2/2.4	石材は玄武岩。基部欠損
9	51	008 P2 振り方	石器	磨製石斧	石器	8.9/4.9/3.0	石材は玄武岩。刃部欠損
9	52	005 墓中	石器	石器	石器	3.8/4.2/0.6	石材は粘板岩。刃部を欠く。穿孔の一端が残る
9	53	014 墓中	石器	石器	石器	4.5/2.4/0.5	石材は粘板岩。外側刃の一端
9	54	008 P12 柱唐上面	石器	打製石斧	石器	8.6/6.3/1.3	石材は玄武岩。完形
13	12	55	006P3	直轄	石器		天井部片で輪郭へカズリ。小片では不明。基部は斜面
13	12	56	006P4	直轄	石器		縫隙片、小片では不明。基部は斜面
13	12	57	006P5	直轄	石器		受け皿片。小片では不明。施部は外側につまみだ。色調は灰褐色
13	12	58	006P1 上面	直轄	石器		刃部の受け皿。小片では不明。口縁施面部に段がつ。色調は暗褐色
13	12	59	006P3	直轄	石器		口縁片。外側に断面三角形の突起がつ。色調は暗褐色
13	12	60	006P3	直轄	石器		頸部片。小片では不明。外側に櫛模波状文を施す。色調は暗灰色。

待回 (FIG.)	図版 (PL.)	番号	地区・部位・清構	遺物の種類	器形	法面(高さ/口径/ 底径/長さ/幅/厚さ (cm))	特徴
13	12	61	007 P 1 握り方上面	須恵器	壺蓋		全体の1/2残存、径は不明確。天井部は回転ヘラケズリ、口縁との間に凹縁状の段がつく。色調は灰色。
13	12	62	007 P 1 握り方	須恵器	壺蓋		天井部片、小片で径は不明。天井部は回転ヘラケズリ、口縁との間に不明瞭な段がつく。色調は反白色。
13		63	007 P 1-2 柱座	須恵器	高杯		円錐片、笠縁に区画された部分に櫛縞波状文を施す。色調は灰色。
13	12	64	015 P 1	須恵器	壺蓋		口縁片、頭部は若干折れ曲がる。色調は灰色。
13	12	65	015 P 2	須恵器	壺蓋		口縁片、頭部は若干折れ曲がる。色調は淡灰色。
13	12	66	015 P 1	須恵器	舟身	2.9/12.8/6.0	全体の1/2残存、底面は回転ヘラ切り構ナデ。色調は灰色。
13	12	67	015 P 1	土師器	壺蓋		~2.2/-
13	12	68	015 P 2	土師器	舟身		舟身のつまみ部分、色調は淡褐色。
13	12	69	015 P 1	土師器	舟身		口縁片、底盤の変形は不明。色調は淡褐色。
13	12	70	015 P 1	土師器	壺		口縁の1/2残存、色調は淡褐色。
13	12	71	015 P 3	須恵器	壺		口縁片、底盤との接合部分で欠損。外縁には凹縁で区画された部分にヘラ搖斜線文。羽状文を施す。色調は灰色。
14		72	008P 2	土製品	筋跡車	径4.9/厚さ2.2	全体の約1/3残存。表面は茎蔓形を呈する。色調は黄灰色。
15	13	73	008 P 11 柱底	須恵器	壺蓋		口縁片、底盤は下に長く折り曲げる。色調は灰色。
15	13	74	008 P 12 柱底上面	須恵器	壺蓋		口縁片、小片で径は不明。底盤は下に長く折り曲げる。色調は黄灰色。
15	13	75	008 P 12 握り方	須恵器	壺蓋		口縁片、小片で径は不明。底盤は下に長く折り曲げる。色調は灰色。
15	13	76	008 P 12 握り方	須恵器	舟身		口縫底部片、内面はほとんど埋没。色調は反白色。
15	13	77	008 P 12 柱底	須恵器	舟身		口縫の1/2残存。底盤は直上上がり。色調は黄灰色。
15	13	78	008 P 12 握り方	土師器	舟身		底盤片、小片で径は不明。底部は回転ヘラケズリ。色調は淡褐色。
15	13	79	008 P 4 握り方	土師器	壺		口縫片、外縁には横方向の平行凹線を施す。色調は黄褐色。
15	13	80	008 P 11 握り方	軟質土器	壺		底盤付近、外縁には平行凹線を施す。内面は微妙な凹凸があり、当て具の痕跡か。色調は黄褐色。
15	13	81	008 P 1 握り方	土師器	高杯		舟身の1/2残存。色調は赤褐色。
15	13	82	008 P 1 柱底	須恵器(陶質 土器)	鉢		外縁には凹縁で区画された部分に櫛縞波状文を施す。色調は灰色。
15	13	83	008 P 3 押き穴	須恵器(陶質 土器)	高杯		脚部頸部か、端部付近に突堤が造ら。色調は反白色。
15	13	84	008 P 4 握り方	陶質土器	器台		脚部、口縫の1/2残存。外縁には凹縁で区画された部分に櫛縞波状文を施す。内面には自然地付する。色調は反白色。
15	13	85	008 P 1 握り方	須恵器(陶質 土器)	器台		脚部片、外縁には凹縁で区画された部分に櫛縞波状文を施す。色調は灰色。
15	13	86	008 P 3 押き穴	須恵器(陶質 土器)	器台		脚部の一部か、櫛縞波状文を施す。色調は暗灰色。
15	13	87	008 P 3 押き穴	須恵器(陶質 土器)	器台		脚部の一部、扇形の透かし孔が丸扁状に配置される。外縁には櫛縞波状文を施す。色調は暗灰色。
15	13	88	008 P 3 押き穴	須恵器(陶質 土器)	器台		脚部頸部、透かし孔の一部が残存。色調は暗灰色。
16	13	89	002 N.O. 9	須恵器	舟身	4.9/13.2/8.0	口縫の1/2残存。底盤付近は完全。色調は暗褐色。回転ヘラケズリ。
16	13	90	002 墓土中	須恵器	舟身	5.0/17.8/10.8	口縫の1/4残存。色調は暗灰色。底盤は回転ヘラケズリ。
16	13	91	002 N.O. 8	須恵器	舟身		底盤の1/2残存。色調は暗灰色。底盤は回転ヘラケズリ。
16	13	92	002 N.O. 5	須恵器	舟身	3.5/13.8/6.6	口縫の1/4残存。色調は暗褐色。底盤は回転ヘラケズリ。
16	14	93	002 N.O. 2	土師器	壺	3.9/12.6/7.9	口縫の1/2残存。色調は淡黃褐色。底部は回転ヘラ切り。
16	14	94	002 N.O. 10. 壙土中	土師器	壺	3.7/13.2/7.0	全体の1/2が残存。色調は淡黃褐色。底部は回転ヘラ切り。
16	14	95	002 N.O. 7. 壙土中	土師器	壺	3.6/13.8/8.8	口縫の1/2残存。色調は淡褐色。底部は回転ヘラ切り。
16	14	96	002 墓土中	土師器	壺	3.9/16.8/8.6	口縫の1/6残存。色調は淡黃褐色。底部は回転ヘラ切り。
16	14	97	002 N.O. 12.	土師器	壺	~8.0	底部小片。色調は淡黃褐色。
16	14	98	002 N.O. 1, 6. 壙土中	土師器	壺	2.0/16.0/13.6	口縫の1/4が残存。色調は淡黃褐色。底部は回転ヘラケズリ。
16	14	99	002 N.O. 11.	土師器	壺	2.0/14.8/12.0	口縫の1/5残存。色調は淡黃褐色。底部は回転ヘラケズリ。
16	14	100	002 N.O. 6. 壙土中	土師器	壺	2.1/14.0/10.5	全体の1/2が残存。色調は淡黃褐色。底部は回転ヘラケズリ。
16	14	101	002 N.O. 2, 4. 壙土中	土師器	壺	1.9/17.2/13.4	全体の4/5が残存。色調は淡黃褐色。底部は回転ヘラケズリ。
16	14	102	002 N.O. 4. 壙土中	土師器	壺	2.1/18.5/14.6	ほぼ完形。色調は淡黃褐色。底部は回転ヘラケズリ。
16	14	103	002 N.O. 3. 壙土中	土師器	壺	2.0/19.4/16.0	全体の3/4が残存。色調は淡黃褐色。底部は回転ヘラケズリ。
16	14	104	003 上面	土師器	壺	~9.0	底盤の1/2残存。高台は高い。色調は淡褐色。
14	14	105	003 下唇	土師器	壺	1.8/16.4/12.6	口縫の1/4残存。底盤は回転ヘラケズリ。色調は淡黃褐色。
16	14	106	003 - 2	土師器	壺		口縫片。外縁は削り目。内縁はヘラ切り。色調は淡黃褐色。
16	14	107	003 - 2	土製品	羽口		羽口の先端部分。表面が削り落している。
16	14	108	P163	土師器	壺		山字形の二重口縫の口縫。色調は黄褐色。
16	14	109	003 灰化物下 層	土師器	壺		牛角状把手。上方に切込みを入れる。色調は暗褐色。
16	14	110	023 墓土中	土師器	納肅	~6.0/-	口縫の1/4残存。口縫片附近に円形の孔が残る。調整はナデ。色調は淡青褐色。
16	14	111	010 P. 5	剝塗土器	鉢		小口器部は不明確。内縁には孔が残る。色調は橙色。
18		112	011 P. 4	白磁	壺		リボン縞の口縫。色調は淡黃褐色を呈する。
18		113	011 P. 4	青磁	壺		玉縞状の口縫。器形は不明確であるが、盤と考えられる。色調は深いオリーブ色。

件名 (FIG.)	図版 (PL.)	番号	地区・層位・遺構	遺物の種類	器形	法量(高さ/口径/ 底径・大きさ幅・厚さ (cm))	特徴
18		114	011 P 5	青磁	碗		縦身室系青磁の底部、高台内側は露胎、色調はオリーブ色
18		115	017 P 4	瓦器	碗	~15.8~	口縁の1/10残存、内面はヘラしき、色調は灰白色
18		116	001 溝上面	土器唇	鉢	~11.9~0	底部の1/4残存、口縁は欠損している、色調は淡褐色
15		117	001 溝上面	施釉陶器(朝鮮王朝期)	皿		口縁片、外面上半は露胎、色調は灰
18		118	001 溝上面	青花	皿		全体部片、外面上に草葉文、色調は白色
18		119	001 溝上面	青花	碗	~11.5~6	底盤片、外面上に芭蕉文、内面に花文、文様は緑がかった青色、色調は灰白色
18		120	001 溝上面	白磁	碗		V型の口縁片、内面に櫻枝文、色調は灰白色
18		121	001 溝上面	青磁	碗		縦身室系青磁の口縁片、内面に櫻枝文、色調はオリーブ色
18		122	001 溝上面	青磁	皿		縦身室系青磁の底部片、見込みに片割れの文様、色調はオリーブ色
18		123	001 溝上面	施釉陶器	水注		注口部分、外面上に釉葉、色調は濃いオリーブ色
18		124	001 溝上面	青磁	水注		把手部分、外面上のみ釉葉、色調は灰オリーブ色
18		125	P10	白磁	碗		口縁の口縁片、色調は灰白色
18		126	P12	白磁	碗		V型の口縁片、色調は灰白色
18		127	P 7	土器唇	皿	1.0~8.8~6.8	全体の4/5残存、底部の調整は不明、色調は淡褐色

表3 遺構別出土石器一覧

遺構	岩形	石材	点数	重量 (g)
001	石核	黒曜石	9	99
001	石核	黒曜石	1	0.4
001	スクレーパー	黒曜石	2	12.1
001	U F	黒曜石	11	23.4
001	U F	サスカイト	1	3
001	碎片	黒曜石	35	40.1
002	碎片	黒曜石	2	0.5
003	石核	黒曜石	2	23.7
003	U F	黒曜石	2	8.2
003	剥片	黒曜石	3	5.9
003	碎片	黒曜石	4	1.9
004	石核	黒曜石	1	12.6
004	剥片	黒曜石	1	1
004	碎片	黒曜石	6	5.5
005	石核	黒曜石	1	4.7
005	U F	黒曜石	1	1.7
005	剥片	黒曜石	1	2.2
005	碎片	黒曜石	16	17.2
006	石核	黒曜石	1	6.8
006	碎片	黒曜石	9	8.2
007	スクレーパー	黒曜石	1	11.3
007	碎片	黒曜石	5	4.4
008	石核	黒曜石	14	108.6
008	石核	黒曜石	2	1.6
008	石核未製品	黒曜石	1	0.7
008	石核	黒曜石	1	4.3
008	スクレーパー	黒曜石	2	8.4
008	U F	黒曜石	21	55.4
008	剥片	玄武岩	3	75.3
008	剥片	黒曜石	33	107.7
008	碎片	黒曜石	94	75.6
008	磨製石斧	玄武岩	1	12.3
009	石核	黒曜石	1	0.8
009	U F	黒曜石	1	1.1
009	剥片	黒曜石	2	4.2
009	碎片	黒曜石	9	8.4

遺構	岩形	石材	点数	重量 (g)
010	石核	黒曜石	1	6.9
010	U F	黒曜石	1	0.5
010	碎片	黒曜石	3	5.2
011	U F	黒曜石	1	0.9
011	碎片	黒曜石	2	2.9
013	U F	黒曜石	1	5.2
013	碎片	黒曜石	2	1.2
014	石核	黒曜石	1	7.9
014	U F	黒曜石	2	8
014	碎片	黒曜石	4	2.9
015	U F	黒曜石	1	2.6
015	剥片	黒曜石	2	4.6
015	碎片	黒曜石	3	2.5
016	石核	黒曜石	2	16.6
016	剥片	黒曜石	1	28.5
018	スクレーパー	黒曜石	1	14.7
018	U F	黒曜石	3	8.2
018	砂片	黒曜石	2	3.5
020	石核	黒曜石	1	9.9
020	碎片	黒曜石	3	2.1
021	剥片	黒曜石	1	3.3
022	石核	黒曜石	7	136.4
022	U F	黒曜石	1	2.1
022	剥片	黒曜石	12	30.9
022	砂片	黒曜石	20	20.2
遺構面	石核	黒曜石	6	43.5
遺構面	剥片	黒曜石	3	10.5
遺構面	U F	黒曜石	7	11.9
遺構面	碎片	黒曜石	13	18.1
近世溝	U F	黒曜石	1	0.3
近世溝	碎片	黒曜石	1	0.9
柱穴	石核	黒曜石	9	99
柱穴	石核	黒曜石	2	1.2
柱穴	U F	黒曜石	4	7.9
柱穴	剥片	黒曜石	18	39.6
柱穴	砂片	黒曜石	22	10.5

表4 器形別出土石器一覧

器形	石材	点数	重量 (g)
石核	黒曜石	55	575.6
石核	黒曜石	6	4.0
石核	黒曜石	2	6.5
スクレーパー	黒曜石	6	46.5
U F	サスカイト	1	3.0
U F	黒曜石	77	238.4
剥片	玄武岩	3	75.3
剥片	黒曜石	239	214.6

3. 小結

調査地点周辺は遺跡群の中でも遺構密度の最も高い場所でもあり、弥生時代から中世にわたる時期の遺構・遺物を検出されている。ここでは周辺の調査成果を踏まえ、遺構の概要を述べていく。

1) 弥生時代前期の遺構・遺物

今回の調査地点は夜白式期～板付I式期の環濠の内側に当たる。環濠はこれまでに北東側を第2次、87次、北側を第18次、56次、133次、西側を第95次、南側を第54次調査で確認しており、そこから復元される規模は南北300m、東西200mの楕円形プランを呈する。環濠内部の遺構の検出例は多くないが、本調査地点南側の第78次調査では板付I式～II式の松葉型の堅穴住居跡、貯蔵穴が検出されている。北側では181次調査では板付I式～IIa式の貯蔵穴10基が検出されている。今回の調査では貯蔵穴4基を検出した。後世の削平により遺構の残りは良くない。時期は板付I式～IIa(古)式段階と考えられる。第181次から本調査地点にかけて貯蔵穴が集中して造られたことが想定される。

2) 古墳時代後期～古代の遺構の変遷

この時期の有田遺跡群の遺構は、米倉秀紀氏により6世紀後半から9世紀にかけての建物群がA～Dの4群に分類され、その変遷が詳細に検討されている。今回の調査で検出した遺構は米倉分類のA、B、C群の建物に相当するもので、幾つかはこれまでの調査地点の遺構と連なるものもある。ここでは各群の遺構について、周辺の調査成果とも簡単に述べていく。

A群建物 (Fig.19) 今回の調査ではSA006が相当する。東西方向に延びる柵状遺構で、調査区外に広がる。遺構の時期は明確ではないが、柱穴から小田編年ⅢA期に相当する須恵器などが出土している。この遺構は北側にある第181次SA003に連なるもので、更に北側に折れて、第107次SA02に接続すると考えられる。この柵状遺構の内部には第181次SB005、006といった総柱建物が並んで配置されており、倉庫群を区画する施設と考えられる。東側の延長は明確でないが、区画の規模は南北長約34m、東西長約37m以上が復元できる。また、この柵状遺構に並行する第107次SA04も同様の構造のものと考えられる。両者は建て替えの可能性も想定されるが、倉庫群を区画する施設が併設していたと考える。同様の遺構は調査地点西側の第133次、第158次調査で確認されている。第158次調査地点ではこの柵状遺構を切るB群の3本柱の柵状遺構が検出されており、1本柱から3本柱の柵状遺構への変遷が想定される。

B群建物 (Fig.20) 今回の調査ではSA007が相当する。南北方向に延びる柵状遺構で、調査区外に広がる。布掘りの掘り方に3本の柱を設置する構造で、比恵遺跡、有田遺跡などで見られる特長的な構造の柵状遺構である。遺構の時期は明確ではないが、柱穴掘り方などから小田編年ⅢB期に相当する須恵器などが出土している。この遺構は北側にある第107次SA03に連なるもので、更に南側に延びて、南側の第78次では東側に折れる。東側の区画は明確ではないが、内側の規模南北長約33mを測る。この遺構に並行して第107次では同様の構造のSA01が検出されている。この遺構は周辺の調査成果から内側の規模で、南北約33m、東西約45mを測る。更にこの区画施設では、南側に2棟、北側に2棟の総柱建物が確認されている。ここで見られる区画施設も前述したA群区画施設と同様に、併設していたと考えられる。A群とB群は区画が併設する状況や規模、内部構造など類似点が多く、両者の連続性を窺うことができる。

このような柵状遺構は有田遺跡群では北から第35次・36次・46次・64次・86次・121次・177次調査地点、第102次調査地点、第105次調査地点、第30次・53次・75次調査地点、第6次・66次調査地点、第158次調査地点で検出され、内部に1～2棟の総柱建物が確認されている。これらの遺構はそれぞれ異なる方位、規模であることから、台地全体に及ぶ企画で造営されたものではないと考えられる。しかし、

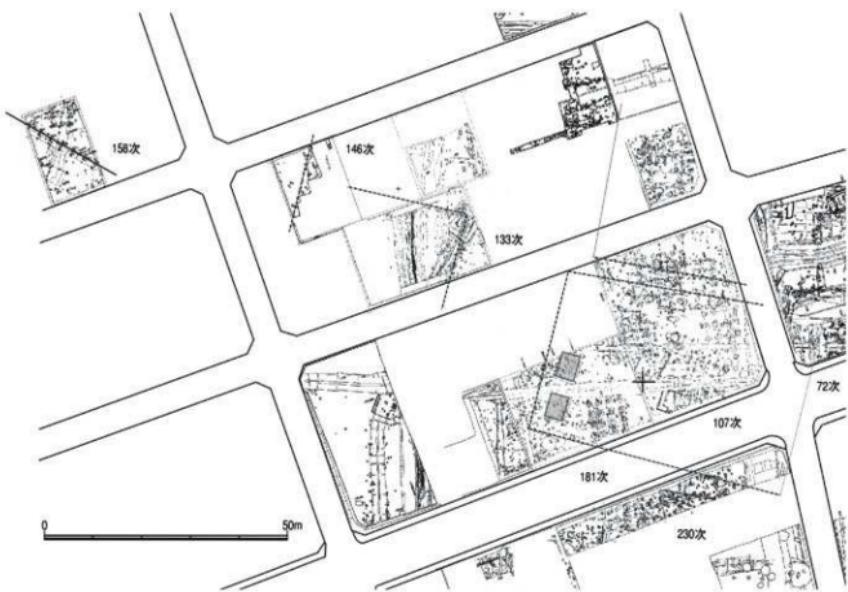


Fig.19 A群建物配置図 (1/1000)

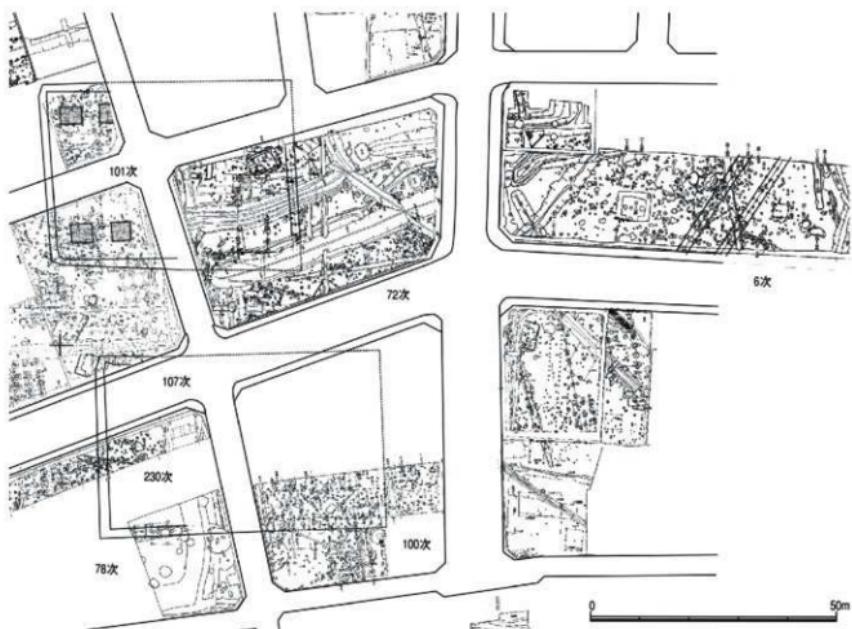


Fig.20 B群建物配置図 (1/1000)



Fig.21 C群建物配置図 (1/1000)

第35次・36次・46次・64次・86次・121次・77次調査地点や第6次・66次調査地点では先に触れた併設した状況が見られる。同様の構造遺構が見れる博多区北恵遺跡では数カ所検出されているが、有田遺跡のような併設する状況は確認されていない。併設に理由に関しては様々な理由は想定されるが、両者の相違を含め、調査例の増加を待ちたい。

C群建物 (Fig.21) 今回の調査ではSB008が相当する。調査区外に広がるため、遺構の全容は不明確であるが、北側に1間分延びて、 3×4 間の総柱建物の南北棟と判断される。出土遺物から8世紀後半から末には廃絶したと考えられる。同様の建物は北側の第107次SB09、06、SB02、第181次SB08で見られる。第107次SB09、06、02は東西棟、第181次SB008は南北棟で、方位はやや異なる。建物の方位から第181次SB08と柱筋をそろえる。これらの建物群はこれまでの調査成果から早良郡衙の正倉建物の一部と想定されている。正倉域と推定されている範囲は第184次、181次で確認された南北溝を西端とし、第47次、第75次、第108次、第124次で確認された南北溝を東端とするが、両者の溝は方位を若干異なる。区画の規模は東西約100m余りである。この正倉域では第82次・32次・29次・55次調査地点で、 3×4 間の総柱建物の東西棟が3棟検出されている。また、第55次調査地点で、その東西棟を切る南北方位の 3×4 間の総柱建物が1棟検出されている。第55次調査地点の南側の第56次調査地点でも同一方向の建物の一部が検出されており、第55次調査地点から続く、南北棟の配列が推測される。これらの建物群の北側では同様の建物は検出されておらず、北限と考えられる。南側についても今回の調査で建物が発見されたことから、この地点まで正倉域が広がることがわかった。更に南側への広がりは今後の調査が待たれる。正倉域の建物は米倉氏の検討により、2群に分類されており、第82次・32次・29次・55次調査地点や第107次で検出された総柱建物の東西棟などをC1群、それとやや方位を異なる第55次、56次、181次で検出された南北棟をC2群としている。今回検出したSB008は後者に含まれるものである。

一方、早良郡衙の政府建物については第189次SB01、SB02、SA03、SB04が相当する。これらの建物は先に述べた第184次、181次の南北溝と方位を揃える。また、C1群の建物群とも方位を揃えることが指摘されている。Fig.21に政府建物と正倉建物の関係を示した。図中の実線は政府建物とC1群建物の方位、一点破線はC2群の方位である。方位は後者では若干東側に振れている。建物配置をみると、前者では正倉域の建物は西側を南北溝、第55次周辺の東西棟を北限と第107次の東西棟を南限とした範囲(約80m四方)に分布している。政府域はその正倉域から約80m離れた場所に設置されていることが分かる。このことからもこれらの施設は同様の企画の元に造られた可能性が高く、第189次で確認された政府にと伴う正倉域はC1群の建物が分布する範囲と考えられる。一方、C2群では北限に変化はないものの、南限に関しては南側に40m近く広がっていることが分かる。しかし、政府建物に関してはこれに対応する変化は見られないことから、大きな時期差ではないのか、未調査部分に別の政府建物が存在するかが考えられる。現状では答えを得ないが、建物群の時期比定を含めて、今後の調査を待ちたい。

D群建物は今回の調査では相当する遺構は確認できなかった。しかし、西側隣接地の第199次では南北方向の溝が確認されている。この溝はそれまでの正倉域に新たに出現した区画の延長であり、内部は総柱建物から側柱建物を中心としたものになっている。C群建物との関連が注目される。

有田遺跡群の古墳時代後期～古代の遺構群に関しては調査成果に増加により、時期的位置付けやその性格についてかなり整理してきた観がある。今後も周辺調査の成果も踏まえ、地道な検討作業を行っていきたい。



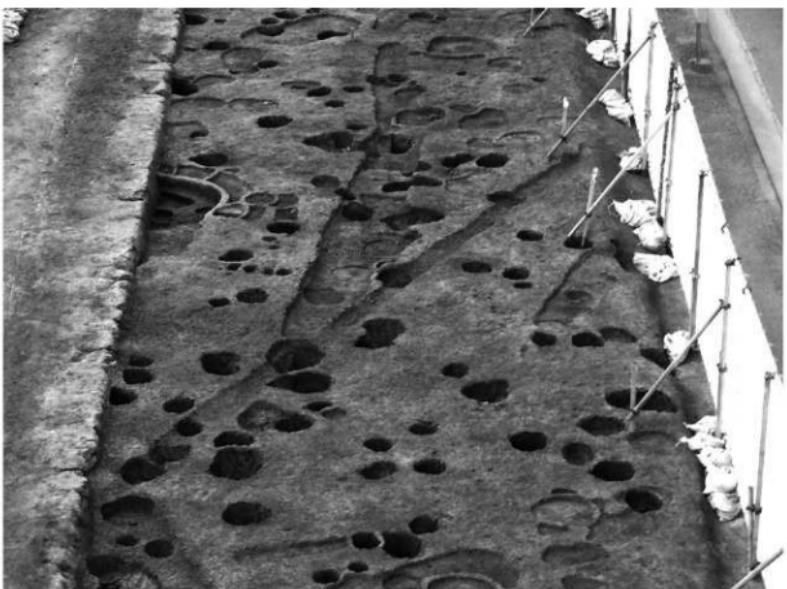
1 調査区全景（西から）



2 調査区全景（東から）



1 調査区西半全景（東から）



2 調査区東半全景（東から）



1 貯藏穴SU023完掘（南から）



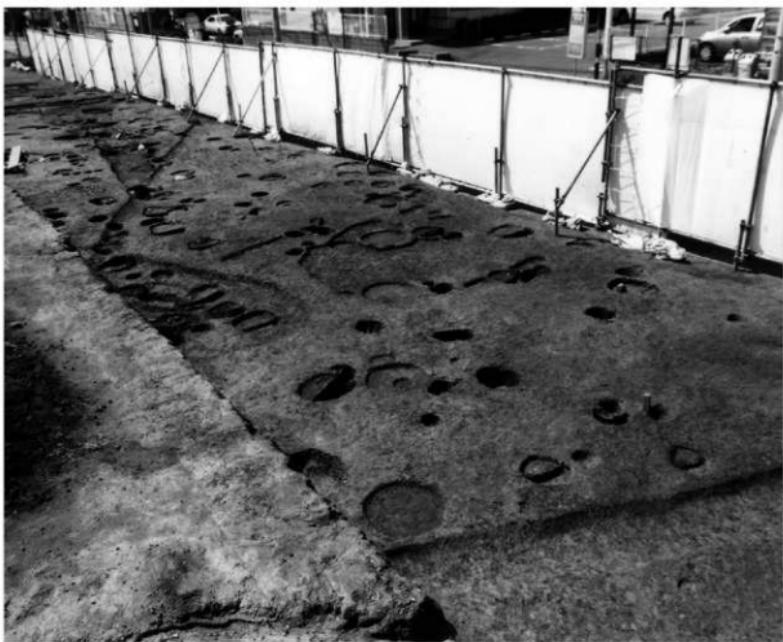
2 貯藏穴SU022完掘（南から）



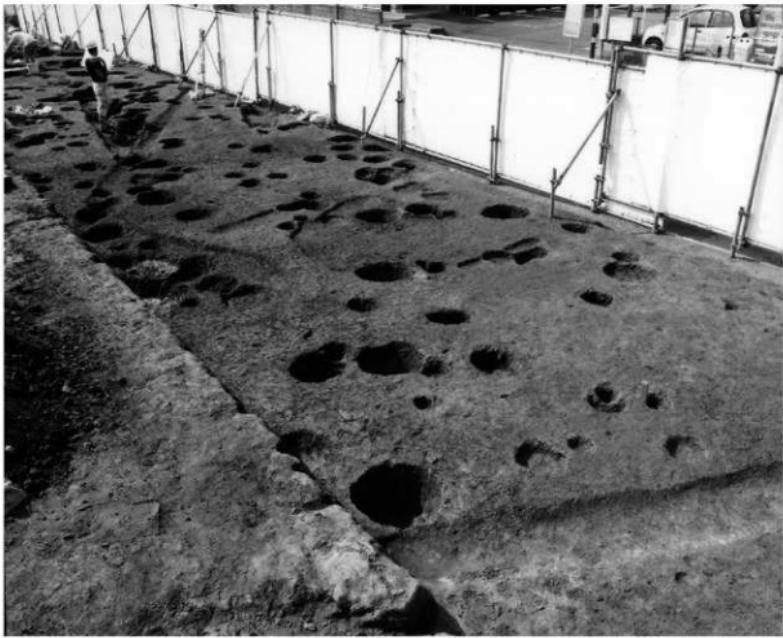
1 土坑SK002遺物出土状況（南から）



2 土坑SK003焼土塊出土状況（北から）



1 桁状構造SA006検出状況（東から）



2 桁状構造SA006完掘（東から）



1 桧状遺構SA007完掘（南から）



2 桧状遺構SA018完掘（南から）



1 挖立柱建物SB008検出状況（南から）



2 挖立柱建物SB008完掘（南から）



1 挖立柱建物SB008—柱穴P01半掘（南から）



2 挖立柱建物SB008—柱穴P02半掘（南から）



3 挖立柱建物SB008—柱穴P03半掘（南から）



4 挖立柱建物SB008—柱穴P05半掘（南から）



5 挖立柱建物SB008—柱穴P06半掘（南から）



6 挖立柱建物SB008—柱穴P07半掘（南から）



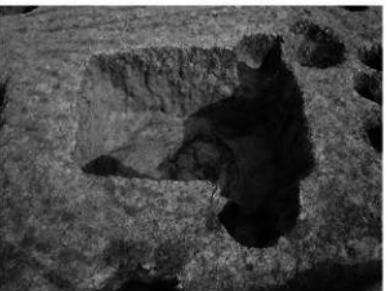
7 挖立柱建物SB008—柱穴P08半掘（南から）



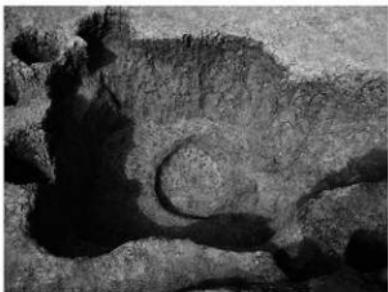
8 挖立柱建物SB008—柱穴P11半掘（南から）



1 挖立柱建物SB008－柱穴P01完掘（南から）



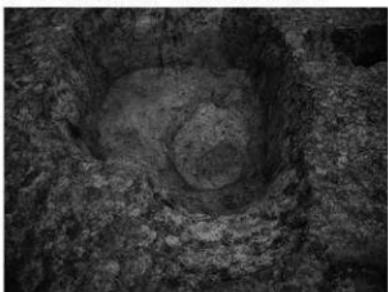
2 挖立柱建物SB008－柱穴P02完掘（南から）



3 挖立柱建物SB008－柱穴P03完掘（南から）



4 挖立柱建物SB008－柱穴P04完掘（南から）



5 挖立柱建物SB008－柱穴P05完掘（南から）



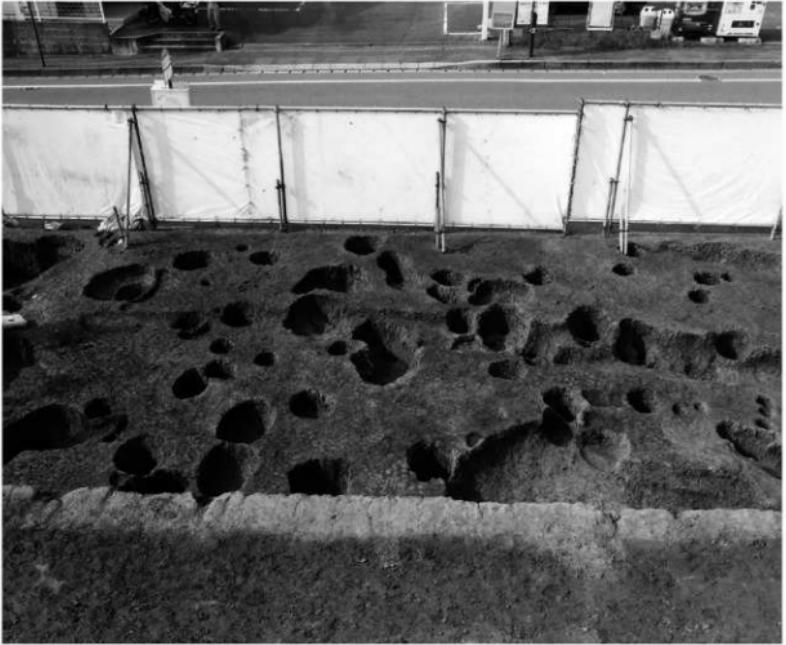
6 挖立柱建物SB008－柱穴P06完掘（東から）



7 挖立柱建物SB008－柱穴P07完掘（東から）



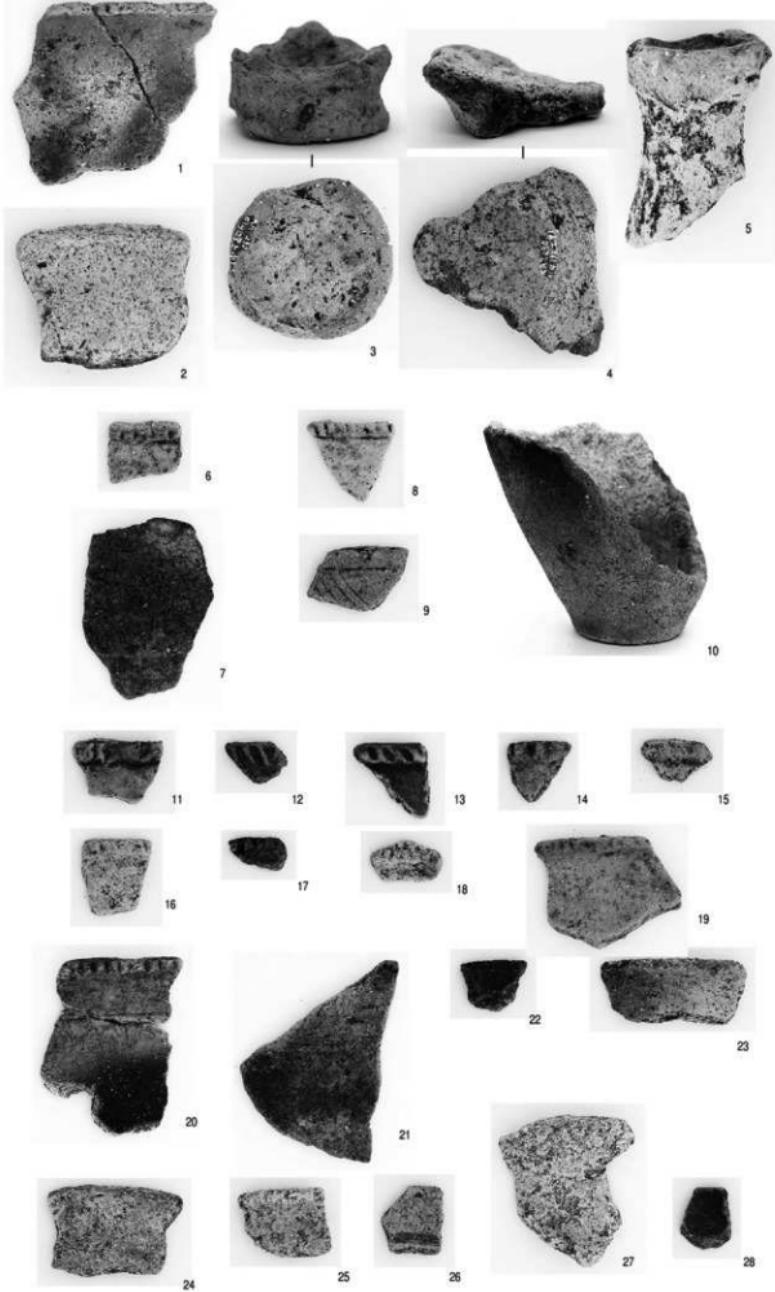
8 挖立柱建物SB008－柱穴P11完掘（東から）



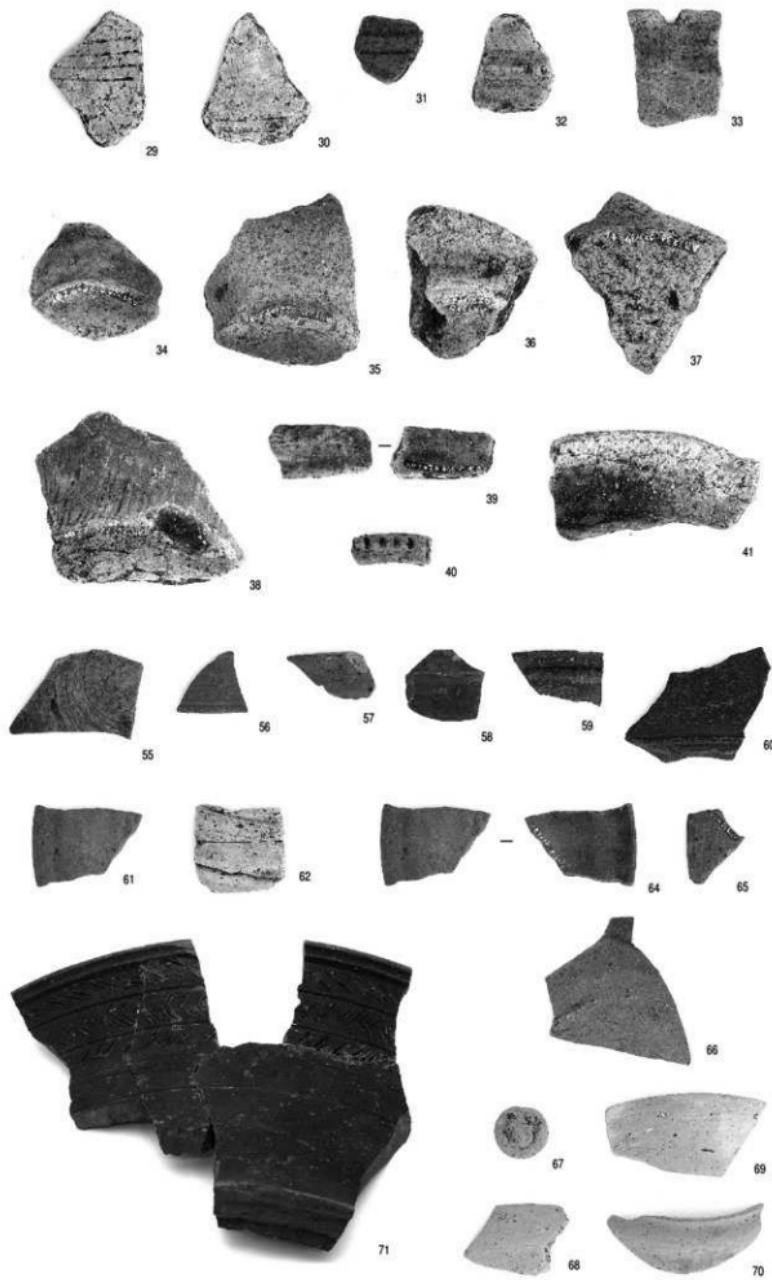
1 据立柱建物SB009、015完掘（南から）

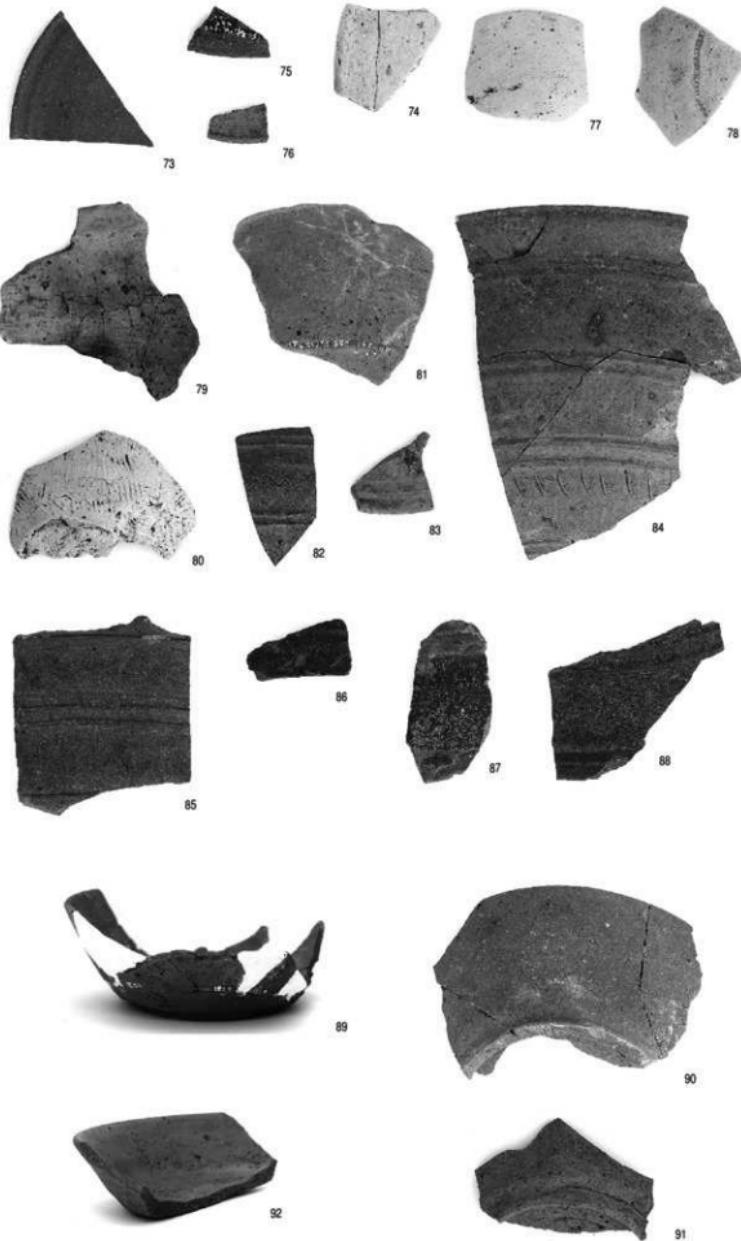


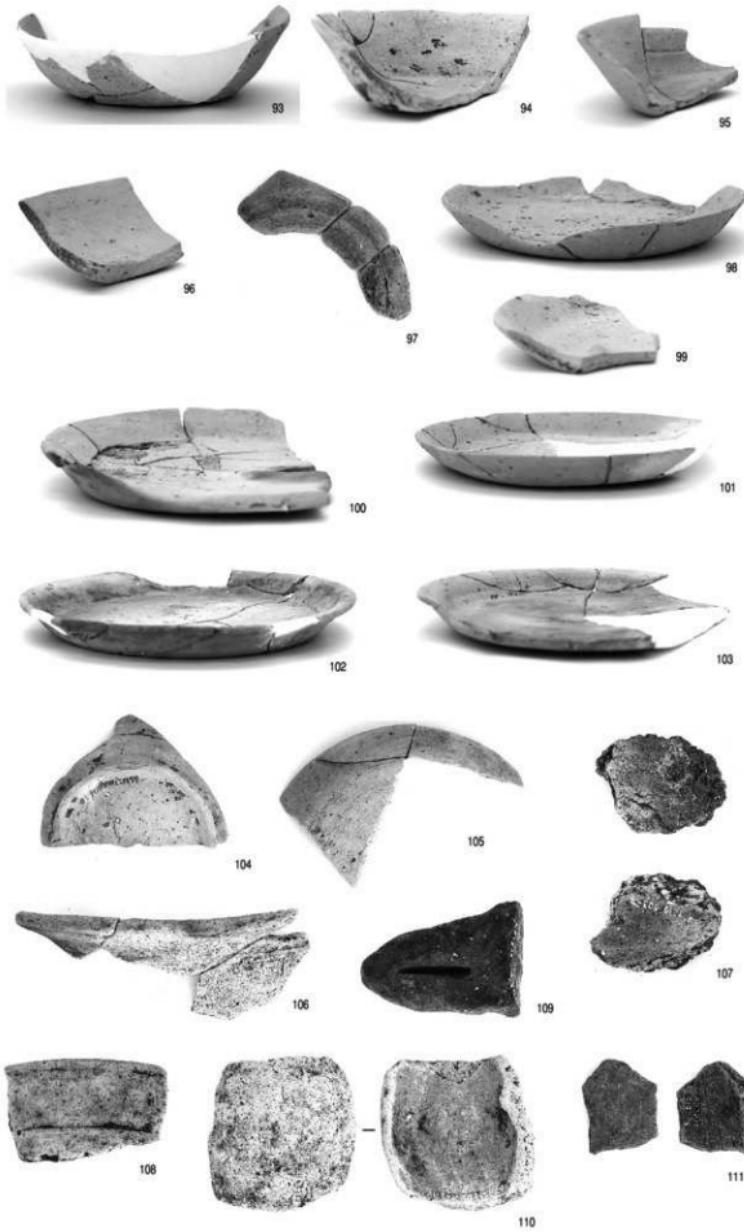
2 满SD001土層（北から）



遺物写真 1







報告書抄録

書名ふりがな	ありた・こたべ
書名	有田・小田部
副書名	有田遺跡群第230次調査の報告
巻次	48
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第1068集
編著者名	菅波正人
編集機関	福岡市教育委員会
発行機関	福岡市教育委員会
発行年月日	20100323
作成法人ID	
郵便番号	810-0001
電話番号	092-711-4667
住所	福岡市中央区天神1-8-1
遺跡名ふりがな	ありたいせきぐん
遺跡名	有田遺跡群
所在地ふりがな	ふくおかしさわらくありた
遺跡所在地	福岡市早良区有田1丁目20-1、20-13
市町村コード	40135 遺跡番号
北緯	33531
東經	1303342
調査期間	2008.8.18-10.07
調査面積	300m ²
調査原因	宅地分譲
種別	集落・官衙
主な時代	弥生-中世
遺跡概要	遺構 弥生時代：貯蔵穴 古墳時代後期：横状遺構 古代（奈良～平安時代）：掘立柱建物、横状遺構、土坑他、中世：掘立柱建物、横状遺構、溝他
遺物	各遺構から弥生土器、須恵器、土師器等の土器類、石鎚、磨製石斧、石包丁等の石器類
特記事項	本調査では那津官家や早良郡衙関連の遺構を検出でき、それらの施設の規模、構造を考える上で重要な成果が得られた。

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1068集

有田・小田部48

—有田遺跡群第230次調査の報告—

2010年3月23日

発行 福岡市教育委員会

(福岡市中央区天神1-8-1)

印刷 株式会社西日本新聞印刷